



特100

852

~~274~~
~~333~~



始



特

渡部萬藏著

經濟學の新知識

東京 新報知社藏版



持100
852

オバチエ
ラース

渡部萬藏著

經濟學の
新知識

東京

新報知社藏版

大正
2. 8. 8
内交

自叙

從來の經濟學は生産消費交換分配の四分説を採るもの多
いが余は需要供給の二分説を採り經濟上の法則として社
會連帶説を採るものである元來社會連帶説は佛國の前首
相ブルヂョーア氏が道德上の見解より唱道したもので最
近佛獨の兩國に於て此社會連帶説に則り法理學の根本的
改造を企つる學者も現はるゝに至つた而して余は更に之
を經濟上の法則たるべきを確信し試に社會連帶説の經濟

學の^{かく}大要^{たいえう}を述べたのは即ち^{すなは}本書^{ほんしょ}である唯^{ただ}余^よは自ら^{みづか}志^{こころ}餘^{あま}りあつて力^{ちから}足らざるを憾^{うら}むのである

大正癸丑の歲孟夏牛込の僑居に於て

著者識

經濟學の新知識目次

第一篇 緒論

事實は理論に先行す——經濟學は科學なりや否や

第一章 經濟學の意義

經濟學の定義は經濟學者の數程ある——初學者は適從する所を知らぬ

第二章 經濟の發展

研究の對象たるべき經濟——自足經濟——都府經濟——國民經濟——其
他の經濟發展の階段の名稱

第三章 經濟學の進歩

正統學派或は古學派——今日の經濟思想と懸隔萬里——教父的經濟論——
 營利階級が勃興——メルカンチリズム——フキジヲクラシ——經濟
 論を一の科學——スミスの偉大——獨逸派として新旗幟——歴史派に對
 し純理派——現代に於ける經濟學者——經濟學の最近思想

第四章 社會連帶說と經濟學……………二五

余は社會連帶說——歐洲の思想界を風靡——民法上の術語——人類共通
 の一大事實——社會連帶の害惡

第二篇 需要論……………三二

人と財との關係——需要の意義

第一章 慾望……………三三

慾望の種類分類——マーシャルの分類法——ロツシヤの分類法——
 プレンタノの分類法——經濟行爲——フキリツボウキツチの分類法——
 人類の慾望は人類活動の根本

第二章 財……………四〇

財の意義——有形物件に限定——經濟財——自由財——人類の慾望を充
 足——財の性質——財に關する重なる謬說

第三章 價値……………四九

消費は慾望充足の目的——生産は需要を標準——輕重の念を名付けて價
 値——交換取引の起る原因——主觀的使用價値——客觀的使用價値
 主觀的交換價値——客觀的交換價値

第四章 價格……………五

交換さるゝ割合を價格——價格は關係的の言葉——消費あつて生産ある

第五章 分配……………五六

財の生産には四要素——社會所得——所得——社會所得の分配に與るべ

き階級——自由所得

第六章 地代……………六三

地主の受くる報酬——土地の使用料——耕作限界——差額は地代

第七章 賃錢……………六五

賃錢には二種類——賃錢の高低を來す原因——労働者剩餘

第八章 利子……………六九

資本の使用に對する報酬——利子成立に關する學說——一定の利率——

利子と地代とは反對の傾向——生産に利用

第九章 利得……………七四

企業は土地、勞力、資本を統合——利得とも利潤とも名付くる——企業

利得に差異を生ずる原因——利得平準の作用

第二篇 供給論……………七九

慾望充足に利用——交換は一種の生産

第一章 自然……………八〇

自然とは土地材料及び勢力——土地——報酬遞減の法則——土地の位置

——報酬遞減の減輕

第二章 勞力……………八五

勞力の數量——マルサスの人口増加の法則——勞力の數量に就て注意——
勞力の能率——國際分業——國內分業——勞働分業——分業が勞働の
効果を増加——分業に伴ふ弊害——弊害の救濟方法

第三章 資本……………九四

利得を生ずる爲めに貯蓄された財を資本——貯蓄の行はるゝ條件——資
本の分類——固定資本——流動資本——固定資本と流動資本との權衡

第四章 企業……………一〇〇

企業とは自己の計算危險——資本家と企業家と區分さるゝ傾向——二つ
の企業的危險——生産過多——企業の種類——大企業の利益——小企業
の長所——會社組織——産業組合組織

第五章 交換……………一〇九

價值増加の作用——私有財産制度——營業の自由

第六章 貨幣……………一二三

物々交換の不便——貨幣の起原——貨幣の職分——貨幣に適當なる性質
——法律の力で制定——グレンシャム法則——自由鑄造——價格の單位——
金本位制

第七章 物價……………一三〇

物價とは貨幣の稱呼——物價の高低の原因——隨意に生産し得べき財——
生産を増加せねばならぬ財——供給に限りある財——獨占價格——小
賣相場——貨幣の變動——通貨——通貨と物價との關係——物價の高低

の影響

第八章 信用……………三〇

信用の意義——直取引——信用取引は如何にして起る乎——財の効果——信用の機關——信用の作用及利益——信用制度の弊害——信用取引の性質及種類

目次畢

經濟學の新知識

オチエラース
オプ、ロース
渡部萬藏著

第一篇 緒論

事實は理論に先行す

るものであるから、經濟學は比較的新しい科學でも、

經濟現象は人類の歴史と共に古いものたるは謂ふ迄もない。總て人類には慾望がある、此慾望を充足する有形物件即ち財を得るために、人類が其精神や體力を用ふる行爲と、此行爲のため生ずる物件の變動とが經濟で、此

經濟學を研究の對象とし系統的に説明するのが即ち經濟學である、併し人間は餘り親近慣熟の事物に向つては注意を拂はぬ傾きがある、歴史を見るに天文學は最も早く進歩し、心理學は却て最近に發達したやうに、經濟現象は斯く迄人類の日常行爲に密接であるが、却つて燈臺元暗しとなつたのは經濟學の發達せぬ重なる一原因であつた。(其他の原因は第三章經濟學の進歩参照)されば今日猶經濟學の範圍や研究法に就ても議論區々で、
經濟學は科學なりや否や を疑ふ人さへある、現に或學者は獨逸學派の泰斗シユモラーの大著「國民經濟學」を「經濟學の存在を否定する最も有力なる書」と酷評した程である。併し經濟學は科學であるは勿論、最近に

至つては其研究方法も略定論あるやうになつたから、今後は恐らく長足の進歩を爲すであらうと信ずる、然らば經濟學とは何、其研究の對象たる經濟とは何、經濟學の發達の經過及び現状は如何であるかを先づ緒論に於て説き、次ぎに本論に移ろう。

第一章 經濟學の意義

人間社會の最も複雑なる經濟現象を研究の對象とする經濟學は、其研究の範圍を定むることは頗る困難である、されば

經濟學の定義は經濟學者の教程ある

と謂ふ笑ひ噺しがある程である。尤も

經濟學は現に進歩發展の行程中にあるもので、之に定義を下すことが出来ぬ否下したとて無益である、恰も影を追ふて奔るが如く、我進めば彼も亦進むは無理からぬ次第である、殊に數學や化學の公式のやうに簡單なる語數で定義を下したとて缺陷が多く、如何なる經濟學者の定義でも是迄非難され論破されぬものが無い、故に過去及び現在に於て社會多數の人に認められた定義を下したものが無い、故に是等は經濟學の定義でなく經濟學の意義とも見るべきものであるが唯參考の爲めに五六の例を紹介する。

英のジョン、スチワード、ミルは「經濟學は富の性質及び其生産分配の法則を研究するもので、直接若しくは間接に人及び社會の状態が、富に關し

し。或は隆盛を來し或は衰頽に赴く所以の原因をも探究する學問である」と

佛のジー、ベーセイは「經濟學は活物として社會團體を研究し、社會團體の有する各種の機關の性質及び職能を研究する學問である」とし。

英のフォーセットは「經濟學は富の生産、分配、交易に關する學問である」とし。

獨のロツシアーは「國民經濟學とは、一國民の經濟發達に關する法則、又は經濟的の國民生活を研究する學問である」とし。

英のマーシャルは「經濟學は人生の日常業務に於ける人類を研究するもの

て、安寧なる生存の物質的要件の獲得、並に使用に最も密接に關係ある個人的及社會的行動の部分を研究するものである」とした。
之を通觀するに或は個人に重き或は國家及社會に重きを置き、或は人に重きを置き或は財に重きを、

初學者は適從する所を知らぬ

有様である、更に最新の研究に成る獨のシユ

モラーやブレンタノの學說として、倫理學心理學の應用を加へ、或は廣く社會現象を網羅し、或は歴史的研究に精緻を致したのみで、其内容の理論には著しき進歩を見ぬ、従つて經濟學に對する定義として以上掲ぐる範圍を出てぬ。又是等の定義の一つ一つを見れば何れも非難はあるが、綜合して

考ふれば經濟學の輪廓だけは朦朧ながら了解出来るだらう。

第二章 經濟の發展

經濟學の意義は前章に於て略ぼ説明した、然らば此科學の

研究の對象たるべき經濟

とは何か、總て人類にはいろ／＼の慾望がある

而して私人及び法人或は國家が此慾望を充たすべき有形物件即ち財（貨物及貨幣）を獲得し使用する行爲、及び此行爲の爲めに起る物件の變動を経濟と謂ふのである。而して今日の經濟生活は幾多の階段を経て來たので、即ち經濟は社會の發達と共に進化し發展して來たものである。此經濟發展

の階段を分つに學者により異同がある、獨のブエヘルは左の通り三つの時期とした、

一 自足經濟

二 都府經濟

三 國民經濟

自足經濟 といは上古草昧の時代に人々の衣食住は極めて簡單素樸で、其經濟行爲は利益を營む爲めてなく、唯其家族と共に自ら生産し自ら消費し經濟單位の間に何等の交通がないのである。此生産とは供給の體現で消費とは需要の體現たるは謂ふ迄もない。然るに經濟が漸々發達すると家族

内の生産、消費のみで満足することが出來ぬやうになり、自ら消費する許りの生産でなく、他人の爲めに生産し、其代りに他人より財（貨物又は貨幣）を受取ることとなり、工業者は都會に住み農業者は其周圍の田舎に居り、都府と田舎との分業行はれ、自足經濟と異り他の經濟團體又は經濟單位と有無相通するやうになる、之は

都府經濟

である、併し此時代は未だ商人なく、生産者消費者直接に有無相通するのみならず、生産者は消費者の注文を待つて始めて生産するので今日の様にまだ注文のないに將來の利益を豫想して生産することがない。後商人階級生じたが、經濟が發達し國際貿易起り、更に今日のやうに國

民として世界の經濟範圍に於て活動することゝなつて、政府は國民を代表し外國と通商條約を結び、或は貨物の輸出入に干渉し國民の利益を増し、國內に於ては益々交通の自由を計り、國民は一團となつて外國に對抗する故に之を

國民經濟

と謂つて、此時代は注文で生産するのではなく市場の影響を豫測して生産する、又生産者と消費者との間に立ち有無を相通する一種の生産者、即ち商人階級は經濟上重要な位置を占めて來た、又自足經濟にも都府經濟にも貨物の受授には信用取引と謂ふものがないが、國民經濟時代には信用取引が大に發達したのである。以上はブエヘルの財の充用に重きを

を置いた經濟發達の階級であるが、

其他の經濟發展の階段の名稱

には獨のリストは國民の生業によりて、漁獵時代、牧畜時代、農業時代、農工業時代、農工商時代の五つに區分した、獨のヒルデブランドは財の交換により、自然經濟(即ち物々交換)、貨幣經濟、信用經濟の三時代とし、シユモラーは政治上より、村落經濟、都府經濟、領域經濟、國民經濟の四期とし、獨のフキリツボツキツチは以上を折衷して、交換なき經濟、交換漸く起れる經濟、普及せる經濟の三階段とした。是等は詳しく説明せずとも何れも名稱によつて略ぼ其内容を了解出來やうと思ふ。要するに是等の諸説には一長一短あつて未だ完全無缺なる

分類とは謂はれぬ。併し經濟は今猶進化發展の行程中にある故、發達階級の分類は如何あらうとも、以上説いた處により其梗概が明かであると共に今後の經濟は益々複雑となり益々擴大し益々發達し行くものであることも認めらるゝてあらう。

第二章 經濟學の進歩

既に述べた通り、經濟は人類の歴史と共に存在したが、之が科學として系統的に經濟現象を説明したのは、英のアダム、スミスが西曆一七七六年に「富國論」を著はしたのに始まる、されば經濟學の鼻祖はスミスで、此説を

繼承する學派を

正統學派或は古學派

と稱する。抑も歐米の今日の經濟組織は、其源は

遠くアリア、セミト民族の文明に發し、希臘の哲學、羅馬の法律、猶太の宗教の影響を受けたものであるが、さればとて今日の經濟學は其何れから見るも直接の產物と思はるゝものはない、つまり社會の進歩と共に發達し來り、最近著しき個人の自覺と産業の自由と文明の進歩との爲めに、斯學の發達をも促進されたのである。昔の奴隸制度を基礎とした産業組織と經濟とを以て國家若しくは公共の爲めに存立するものとする根本觀念は、

今日の經濟思想と懸隔萬里

或點に於ては今日と全く矛盾した思想であつた、

從つて今日の所謂經濟學的思想なるものはあらう等なく、偶々アリストテレスやプラトーンの議論の中には精緻なる經濟學説ないではないが、是多くは主題でなく唯議論の行き懸りより來たもので、決して直接經濟生活其のものを研究の對象とした譯でない。其後歐洲中世の教會法學者の議論にも面白いものがあつて、此

教父的經濟論

は決して彼の希臘羅馬の哲學的經濟論に劣る者でない、されど當時の經濟組織其ものが未だ系統的に説明する經濟學を喚び起す程に發達して居らなかつた、唯其時勢に應じた時事論に過ぎぬこと、恰も支那や日本の舊時の學者が政治的見地より議論を立て、經濟政策に及んだや

うなものであつた。然るに中世の終り近世の始めに、いろ／＼の新發明、新發見が起つて、歐洲の經濟が大に活氣を生じ、且つ第三階級即ち

營利階級が勃興

し、又他の方面に於ては「ルネサンス」時代に屬し個人の自覺が其萌芽を呈すると共に、政治上の中世の分權割據を破り、國家の統一、中央集權の新しい趨勢を來したのである、されば此時代は有ゆる問題は國家を中心とする傾向であつても、亦希臘羅馬時代の個人を無視した思想とは全く異つた新思想が生じたのである、而して經濟上に於ても此統一集權に經濟的基礎を置いて、學者は「如何にして國家を富すべきか」の論究に努めた。然るに當時の事情は國家を富すは國內に貨幣の集積を計るの必

要あつたので、當時の經濟主義たる

メルカンチリズム

は後世より富と貨幣とを同一視するものだとの誤解を受けた、又當時國を富ますには極力商業を保護獎勵する必要あつたので「メルカンチリズム」は自然の發達に放任せず、國家の力で干涉しても貿易上の利益を獲得しやうとしたので、我國では之を重商主義と譯して居るが、寧ろ之は人為主義とも譯すべき言葉である。併し「メルカンチリズム」の時代は未だ經濟學は起らなかつた、且つ此主義とて學説と謂はんより一の時事論に過ぎぬものであつた。然るに十八世紀の中葉に至つて佛國の路易十五世の侍醫ケチーは

フキシチクラシー

を唱へ出した、之は天然に服従し其理法に一任し之に人為的作用を加へぬ主義である、經濟學の鼻祖アダム、スミスは、此「フキシチクラシー」に負ふ所が多い、後世英國の自由貿易主義も其淵源は之にあると謂つて差支へない、然るに此主義が唱出された當時は、「メルカンチリズム」の極端なる干涉の餘弊が太甚しく醸成されたので、獨り商業のみならず農業をも發達せしめ、總て經濟は自然の發達を俟ち濫りに人為の抑制を加へてはならぬと主張したものだ、されば我國では之を譯して「重農主義」と謂ふも、寧ろ之は「天則主義」とした方が穩當かも知れぬ。亞いて英のアダム、スミス出て、經濟を系統的に説明し、ともかく

經濟學の一新科學

らしきものとした、最も英國でスミス以前に相應に纏まつた經濟論を試みた學者が尠くない、ヒュームとかスチュアートとか、統計的經濟研究の開祖ウキリアム、ペターとか、農學の泰斗アーサー、ヤング并にアンダーソンとか、アダムスミスの師たる哲學家ハチソンとか隨分斯學に貢献した學者はあるが、スミスは遠く群嶽を抜く秀峰の如く巍峩として獨り聳へて居た、最もスミスの議論の中には極端に自由貿易主義や個人の營利行動の放任やを主張した缺點もあるが、之は以前の「メルカンチリズム」や「フキジラクラシー」のやうに時事論に關係したる部分と見て差支へない、此缺點の爲めにスミスの科學的研究の光明は奪ふことは出來

ぬ、殊に感嘆に堪へぬのは其研究の態度は今日最新の學者の態度と吻合すること、決して英國學派の通弊とする獨斷抽象の傾向がなく、演繹推理では流石に斯學の鼻祖と仰ぐべき程あるが、更に歴史的現實的研究の態度は今日の獨逸の歴史派にも譲らぬ、つまりスミスの演繹に偏せず歸納に傾かず、中正の態度を執つて眞理を闡明しやうとするは、斯學界に現に起りつゝある最新の研究態度に同一であるは益々

スミスの偉大

なる所以を證明するものではないか。其後英國にリカードやミルやフォセツトやレスリーやベジヲツトやケルレンズやトインビーやジエヴォンスなどの經濟學者現れたが、殆どスミスの明月の光りに掩は

れた群星の如き有様である。佛國にはセイやクルなどの學者現はれて、英國學者の誤謬を正した點も尠くない。米國にはケリー現はれ獨逸にはリスト現はれて共に英國學者の自由貿易主義に反對して保護主義の爲めに萬丈の氣焰を吐いた。其他和蘭、伊太利、埃太利などにも經濟學者が現はれて、從來經濟學を獨占した英國も、一時殆ど顔色ない有様であつた。獨逸の經濟學の鼻祖とも稱すべきはヘルマンであるが、眞に

獨逸派として新旗幟

を樹てたのは、遙かに後れて出た、ロツシアー・クニース・ヒルデブランド三學者の始めた歴史派である、其れよりラウやヘルドやシエフレやコーンが現はれ、現今ではワグナー・シユモラー・ブレン

タノの三大家があつて、此三大家及此流水を汲むもの、即ち獨逸のゾムバルトとかビューヤーとかヌチータとか、其他の國にもある最近の學者を「新歴史派」と謂ふのである。然るに

歴史派に對し純理派

とも謂ふべきものが最近に現はれ、經濟學上の根本概念たる財とか價值とか資本とかに就いて精緻な研究を試みて居る、メンガーの率ゆる、ヅキンナ學派が是である、獨逸學派が餘りに歴史とか記實とかに重きを置く反動として、此純理派が現はれたので、一時學界の壯觀であつたシユモラーとメンガーとの論戰は之を證明するものである。最近此純理派にはメンガーを始めボエム・パウエルクやフオン・ウキザーやシユムベ

ターなどの大家がある。其他の國に就て之を見れば

現代に於ける經濟學者

として英には獨のシユモラーと共に現代斯學界の

泰斗と目される、マーシャルがある、其他アシユレー及フエツターがある、米にはタウシツヒヤセリグマンやフヒツシヤークラークがある、佛にはヂートがある、伊にはスピノーやバルトがある、何れも最新の研究方法で新學説を樹て居る。然らば

經濟學の最近思想

は如何、又其將來の傾向は如何と謂ふことに就て此篇

を結ばうと思ふ、其れには獨逸派の泰斗シユモラーが經濟學者が現在に於て一般に合致して共同の立場とする所であると其著書中に述べたものを左

に掲ぐる、尤も我國の福田博士も英國派の泰斗マーシャルが常に唱へる向後の經濟問題となす所も此範圍を出てぬから、之を以て經濟學界の定論として差支なからうと謂ふて居る。

一進化發展の理法を經濟學研究の根本となすこと。

二心理倫理の研究を以て根本概念を定め、往時の學者のやうに、抽象的の「經濟人」の如き假定を除くこと、從つて其主要の問題として左の研究をなすこと。

一近世の産業自由の原則は歴史的產物であることを認識し原則としては個人並に所有權自由の存續を主張すると共に、共同主義の作用を認め、其

研究を重ずること。

二社會階級の分岐は社會進歩の要件であるを認識すると共に、其弊害の伏在する所以をも充分に研究し、殊に社會多數の人間の生活状態の改良向上を尊重すべきこと。

三アダム、スミス以後の極端な世界主義の誤謬であることを認識すると共に國と國とが心ずしも利害の衝突するものでなく、國際經濟政策（商業政策）は敵對思想を基礎すべきものでなく、之によつて國際間の調和を進め、世界經濟の樹立に貢献するを努むべきこと。

尙余は之に社會連帶の法則は、如何なる經濟行爲をも支配すべき關係にあることと加へたいと考ふるのである。

第四章 社會連帶説と經濟學

従來の經濟學書の多くが生産、分配、交易、消費の四分法を採つたが、余は本書に於て需要と供給との二分法を採り編次の形式を異にした、併し之は唯組織の上の事であるが、さて其思想上に就てはどうかと云ふに

余は社會連帶説

を採つて居る、全體科學は系統的の研究法を以て眞

理を闡明するもので、主義とか説とか立つべきものでないが、是迄の學説に缺けて居り若しくは不充分の點あるを補ふため説を立つると、其れが何

主義とか何説とか名つくる場合があるから、不穩當ではあるが余の經濟學は社會連帶主義經濟學と名づけても差支ない。然らば先づ社會連帶とは如何なるものであるかと謂ふに、之は佛國のレオン、プーアルヂョアの始めて唱道したものである、一八九六年プーアルヂョアは「社會連帶」と題する著書を公にし、此説を首唱したが今や年々其説の勢力が加はり、佛國ばかりでなく最近に至つては

歐洲の思想界を風靡

する大勢力となり、ポルドー大學教授レオン、ヂュギ

ユイは此説を法律上に應用し、個人の權利、團體の權利なるものを絶對に不認し、個人も團體も法律の規則は社會連帶の法則に本づくべきものであ

ると主張し、今や法學上の一大革命を喚び起しつゝある。然るに經濟學に於て未だ此説を採るものが無いやうだから、余は本書を著はすに當り此法則を根底として執筆した。プーアルヂョアの社會連帶説によれば、人類の社會連帶の爲めに働くは決して理義の解釋や法律の權義から出たのでなく水の低きに就き花の時に咲くが如きもので、内部の衝動で止まんと欲して止む能はざる爲めてある、唯水や花は意識がなく人類には意識があつて、自己の行動を自覺する差別ある許りであるとする、本來連帶なる言葉は

民法上の術語

て、數人の債務者が連帶債務を負ふときは、其中の一人

は恰も一人の債務であるやうに、債務の全額を負擔し、債務者の一人が之

を辨濟するときは、他の債務者は悉く其義務を免れる特別の場合がある、社會連帶なる言葉は便宜上此民法上の術語を借り來つたもので、科學的基礎もあり、深遠なる人生觀もあるのである、併し社會連帶の思想は決して新らしいものでない、唯ブールヂョアが系統的に又最も剴切に唱へ、思想界に甚大の影響を與へたので、恰もアダム、スミスを經濟學の鼻祖とする様にブールヂョアを社會連帶説の首唱者としたのである。抑も社會連帶は人類共通の一大事實であるから經濟現象も亦此事實の上に立つて居るは謂ふ迄もない、人類は古來共同生活を營んで來たもので、歴史利害を同ふする者は共同の利害は共同の努力で解決する、之を同類に因る社會連帶

と謂ふのである、又文化が發達すれば分業が行はれ、何人も他人の力に依らず單獨に生活することは出來ぬ、之を分業に因る社會連帶と謂ふのである、吾人の衣食住を始め社會百般の事物は吾人の祖先が過去幾千年の間の經營慘膽の結果で、吾人が今日安穩に生活し得るは皆祖先の恩賚である、故に吾人は祖先の遺業を承繼し之を増大して子孫に遺す義務がある、即ち何れの時代の人類でも過去、現在、未來に亘つて連帶の關係がある、之を時間に於ける連帶と謂ふのである、分業とか協力とかの外に又地域を限つた社會とか國家とかの外に國際間にも分業あり協力あり、又共同の利害もあつて廣く人類の幸福を増進するに努めて居る、是等を空間に於ける社會

連帶と謂ふのである。而して社會は又

社會連帶の善惡

を生ずることもある、假令ば一方が衛生上の注意を

怠つた爲めに他に疾病が傳播し、又は一人が犯罪を爲して他が之を模倣するとか、連帶を悪用し或は雇主は労働者を虐待して暴利を貪るとか、或は個人も國家も利益の爲めに他國を侵害するとか、謂ふ場合が即ち之である併し連帶を悪用すれば終局自分が不利益となる、智識が發達すれば如何なる場合でも社會は共同の利害であることが明瞭になるとは、社會連帶説である、此社會連帶の現象は誠に著しく經濟生活に顯はれて居る、個人間でも國際間でも貿易は相互の利益である、分業も共同の利益から生ずる、

又前に掲げた例の雇主が労働者を虐待するは一時は利益のやうでも、斯くては労働能率を減殺して結局企業者の損失に歸する、社會連帶説の主唱者ブールヂョアは現に之を以て道徳上の權威とし、社會教化のために熱心鼓吹しつゝあるが、余は之を經濟學上の法則とすべきものと信する、何となれば社會連帶は人類社會共通の一大事實で、此事實上に一貫の法則を抽象し來つたのが、社會連帶主義である故、經濟學の法則も亦當然之に合致すべき筈である。

第二篇 需要論

經濟とは社會連帶の一作用で

人と財との關係

を謂ふのである經濟行爲とは此經濟の目的を達する爲め換言すれば人類の欲望を充足すべき財を獲得或は變動する爲めに、其精神や體力を勞することであるから、經濟學は宜しく經濟行爲を中心として研究すべきものである、而して此經濟行爲は需要と供給即ち人と財との關係となる、而して需要は體現して消費となり供給は體現して生産となるのである供給は後篇に説明するから茲には

需要の意義

を述べんに、需要とは欲望を充足する爲めに他の財を要する時、反對給付即ち他に對しても亦或財を提供し、他より其目的の財を得得ることである、故に需用の部に於て通説の消費と交易とを研究するのみならず、先づ需要の動機たる欲望と欲望の對象たる財と、財の價值及び價格より説き起さねばならぬ。

第一章 欲望

人類の欲望にはいろいろある、従つて學者間には

欲望の種類の分類

にはいろいろ異なつた意見がある、獨のヘルマンは

- 一、絶對的慾望 ぜつたいてきよくぼう 相對的慾望 そうたいてきよくぼう
- 二、高等慾望 かうとうよくぼう 劣等慾望 れつとうよくぼう
- 三、急切慾望 きふせつよくぼう 延期し得べき慾望 えんきよくぼう
- 四、積極的慾望 せききよくぼう 消極的慾望 せうきよくぼう
- 五、直接慾望 ちやくせつよくぼう 間接慾望 かんせつよくぼう
- 六、一般慾望 いぱんよくぼう 特殊慾望 とくしゆよくぼう
- 七、常經慾望 じやうけいよくぼう 間歇慾望 かんかくよくぼう
- 八、永久慾望 えいきうよくぼう 一時慾望 いちよくぼう
- 九、經常慾望 けいじやうよくぼう 非常慾望 ひじやうよくぼう

十、現在慾望 げんざいよくぼう

將來慾望 しやうらいよくぼう

十一、個人慾望 こじんよくぼう

團體慾望 だんたいよくぼう

十二、私的慾望 してきよくぼう

公共慾望 こうきよくぼう

に區別した、併し之は常識的で殆ど必要の無い分類である、さればマーンヤルは其大著「經濟學原論」中に此區別は價值多からずと批評したのである然るに

マーンヤルの分類法

は人類の心理上の衝動から議論を立て、先づ快不快

の感情に論を起し、(一)自存衝動、(二)性的衝動、(三)行動衝動、(四)認識衝動、(五)競争衝動、(六)營利衝動の別を説いたのは、慾望分類法と

しては最も進歩した立場に在るものと謂はねばならぬ。

ロツシヤーの分類法

は慾望を(一)自然に出づるもの、(二)地位に伴ふもの、(三)奢侈に出づるもの三種としたは、彼のヘルマンの説と同様で價

値ある説とは受取れぬが、經濟學者中此分類に従ふ者も亦尠くない。

アレントノの分類法

は慾望を緊要の度により順序を立て、左の如く分類した、之もヘルマンやロツシヤーよりも進んだ見解である。

一、生命維持の慾望

二、性的慾望

三、聲聞を來むる慾望

四、死後の計に對する慾望 (宗教上の慾望)

五、保溫の慾望

六、將來の計に對する慾望

七、療養を求むる慾望

八、清潔を求むる慾望

九、學問技藝に對する慾望

十、創造せんとの慾望 (即ち行動の慾望)

斯く慾望にはいろ／＼あるが、兎に角經濟的慾望とは、人類の生活を營むに當り、感ずる不足の念と之を満足せしめんとする希望とを謂ふのである

而して此經濟的慾望の人類の行爲に現はれたるを

經濟行爲

とする。

慾望（即ち經濟的慾望）は社會連帶の作用で、人類社會の發達に伴うて漸次高尚となり又多種類となるものである、此の社會の發達なるものは、科學技術の進歩と交通機關の整備と慾望の向上とは互に原因となり結果となつて、際限なく進化發達し、今猶其行程中にあるは事實の證明する處である。人類の慾望増進すれば之を満足せしめん爲めに科學技術及び交通機關の發達を促し、又科學技術及び交通機關が發達すれば慾望を挑發する、否尠くとも便利であるから慾望を抑壓する必要がなくなる、假令ば田舎では立派な贅澤品を知らぬから之に對して慾望が起らぬ、

中には知つて居る品物もあるが、不便の土地で之を得ることが出來ぬから慾望を抑壓するが、都會の地では慾望が高尚で且つ多種類であるやうに、野蠻時代と文明時代とは、其の慾望と慾望を充足すべき財と共に大なる懸隔あるは謂ふ迄もない、權を得て蜀を望むは人情の常で、人類の慾望は限りなく發達するもので、

フキリツボサキツチの分類法

は慾望を必要的慾望と文明的慾望との二つとし

た、實に人類は先づ痛切に其生命、健康を維持する慾望があるが、之が解決をすれば社會的生活に於て地位を向上し、或者は此地位に相當する慾望即ち高尚なる生活（地位の低き者よりは奢侈と見らるべき）、或は名聞に

對する慾望を起すに至り、或者はシエモラーの所謂行爲の衝動で、行爲其ものゝ爲めに活動し慾望は寧ろ之に隨伴し來る場合もある。併し此文明的慾望は必らずしも必要的慾望を満たした後に起るとも限らぬが、兎に角

人類の慾望は人類活動の根本

て、之を抑制することが出來ぬから、道

徳法律の力で慾望の發達を誤まつた方向に進ましめぬやうに注意せねばならぬ。即ち人類の大多數が明確に社會連帶の法則を會得せぬ今日の時代は慾望の調節に注意すべきは謂ふ迄もない。

第二章 財

財の意義

に就てはいろいろの議論あるが、其文字よりすれば英語のグー

ツで學者によつては財貨とも富とも謂ふ、併し富は英語のウェールスで唯

「富有なる状態」を指すのである、財とは現今の經濟社會に於ては貨物と貨

幣とを包含するもので、人類の經濟的慾望を充たす有形物件を意味する。

財の範圍に就て慾望を充たすべき有形物件を財とすることは、往時の英の

正統學派以來の定論であつたが、其後財の範圍を廣めて無形のもの即ち技

藝上の熟練とか商業上の才能とか謂ふもの迄を含ましむるの可否と、又之

を含ましむるには如何なる範圍まで限定するかに就きて、學者の議論の分

れる所となつた、現代に至りマーシャルは財を内界財と外界財とに判つた

から勿論無形のものまで財とする定義である、然らば無形のもの全部を財とするやと謂ふにマーシャルは其經濟學原論に於て唯無形のものも財たることありと曖昧に説明してある許りである。併し余は財は人類の慾望を充足し且つ貨幣價値にて比較秤量し得べき社會連帶上認められた

有形物に限りしとするを穩當なりと信するものである。されば無形のものも財と謂ふこと出來ぬ許りてなく、有形のものでも悉く財と謂ふことが出來ぬ、通説の財を分ちて自由財と經濟財とするが、其所謂自由財は財ではなく、經濟財のみが財と謂ふべきである、故に自由財と經濟財と對立して分類するは無意義であるが、比較對照の便宜上經濟學に於て説明の途序、

自由財を解釋することも亦敢て不可なりとせぬ。然らば通説の自由財と經濟財とは如何なるものなりやと謂ふに、

經濟財は前に説明した通りで、其數量に限りあるから、之を使用し獲得する爲めには若干の犠牲又は反對給付をなさねばならぬ。之には慾望を充たすに直接と間接との二つの種類がある、既に出來上つた機械や料理した食物や縫ひ終つた衣服などは前者の例で、金屬木材とか食物の原料とか反物とかは後者の例である、學者中には前者を使用財或は利用財と謂ひ後者を生産財と名づくるものもある。

自由財

は其供給も多く何等の犠牲又は反對給付をなすことなく、自由

に使用し或は獲得することが出来る、之に絶対の自由財と相對の自由財との二つの種類がある。絶対の自由財とは日光、空氣、水或は公海の水産物等で、相對の自由財とは其性質上自由財ではないが法律慣習の爲めに使用獲得を許されてあるもの假令は古の原野山林の如きものである。而して絶対の自由財でも人類が或犠牲を拂つた以上は、其物件は既に有限で且つ占領されたものであるから經濟財である。假令は公海中より魚介、海藻類を採集し、若しくは高山原野より昆蟲草苔類を採集して標本若しくは参考品とした場合には、勞力若しくは費用を要した占有物で既に自由財でない、又海水は自由財であるが海水浴場の營業者が、營利の目的で汲み取り之を

占有するは經濟行爲で、之と同時に其所有權は營業者にあるから自由財でない。又通説には經濟財を存在量有限のもの自由財は存在量無限のものとするも、必ずしもさうでないから、此通説は科學上價値のないものである。其他學者によつては財の分類に就きて種々なる説を樹て、居るが、要するに財とは

人類の慾望を充足

し且貨幣價値にて比較秤量し得べき有形物件である。

故に外界に存在する物件は何でも財となる譯ではない、伊國現代の經濟學界の泰斗スピノは「利用ある物即ち一の慾望を充たすこと出来る物を財と謂ふ」と定義を下し、其財の要件として

(一) 之に對して慾望の存すること

(二) 此慾望を除却する性能を有すること

(三) 此官能を人が認識すること

(四) 此財を以て慾望充足に供する便宜の與へられたること

とした。是財の要件としては最も進歩した見解である。尤も此説は内觀的に慾望を根本とせず、外觀的に物件を根本としたものであるが、之を裏返へしにして見れば

財の性質

手は次ぎの條件を備へたものとなる、其一は人類には慾望がある此慾望を充足する爲に心身を勞して外界の或物件を獲得せんとする、即ち

經濟行爲の對象となるべきものでなければ財と謂はれぬ。貨幣は吾人に取つては重要な財であるが、南洋の土人中には貨幣を顧みず赤や青の布片を欲するものがある、即ち彼等は貨幣に對して慾望がない、故に貨幣は彼等に取つては財でない。其二は慾望を充足する性能、即ち有形物件で占有保存及讓渡し得べきものである。學者によりて才能、熟練、勤勞等を内界の財とし、外界即ち有形物件と共に之を財即ち經濟財とするものもあるが、之は

財に關する重なる謬説

である。才能や熟練は其人特有のもので保存、讓渡することが出来ぬ、即ち他人が此才能や熟練を慾望するも充足すること不

可能である、又勤勞は慾望を充足する爲めの精神及び身體上の奮勵努力で、其を經過すれば消滅するもので保存讓渡すること出來ぬから財では無い、されば財は有形物件で占有保存及び讓渡し得べき性能を備へねばならぬ。其三は吾人は或物件に對して、吾人の慾望を満足する性質あることを認識せねばならぬ、認識とは外界の現象に接觸した時に之を感知すること、吾人は智識の進歩するに従つて慾望を充足すべき物件を多く感知するやうになるが、等しく慾望を充足し得べき物件でも、智識の進歩せぬ時代は全く之を感知せぬから財と稱すること出來ぬ。其四は社會連帶の一作用即ち社會共通の約束換言すれば道德、法律、習慣等何れの方面からも差支ないのである。

第三章 價值

く處分し得るものでなければならぬ、假令吾人の慾望を充足し得る性質のものでも、之を處分すること出來ぬもの、即ち國法で嚴禁された出版物やうのものは財で無い。以上の解釋は或は多少スピノの説と異なつた點もあるだらうが余はスピノの財の四要件を斯く解釋したならば良からうと信ずるのである。

消費は慾望充足の目的

て需要の體現である、生産は供給の體現で慾望充足の手段である、生産は直接消費に對して起るか若しくは消費あることを

豫定して起るものである、故に生産者（商人殊に甚だしきは投機者流）の需要の爲めに物價の騰貴することがある、又生産者（製造業者）が物價騰貴の見込即ち俗に賣惜しみの爲めに商品拂底となることあるが、結局需要とは消費者の需要の外なく、生産者（製造業者商人等）の需要は第二次需要で、第一次の消費者の需要を基礎としたものである。マーシャルの「消費者の需要は營業的需要を支配す」とは此謂である、而して

生産は需要を標準

として行はるゝので、生産者の財の生産、購入若しくは運搬保管等は、之によつて生ずる利益を目的とするのである。抑も經濟は慾望が發足點で、慾望充足の需要となり、之に對する供給が起るので

あるから、先づ需要を説き次に供給を説くが合理的の順序であらう。財の慾望を充足するに當つてはいろ／＼程度があるので、吾人は財に注ぐに輕重の念がある、此

輕重の念を名づけて價值

と稱するのである、財が直接に慾望を満足する

場合の價值、即ち飲食物で饑餓を醫するとか、光火で燈熱を得るとか、被服で寒暑を凌ぐとか謂ふのは之を使用價值と名づくる、而して今日の如く複雑な經濟社會では直接慾望を充足する財のみとは限らぬ、或る財を以て他の財と交換して慾望を充足することがある、此場合に自分の財と他人の財と交換するに當り吾人の財に注ぐ輕重の念を交換價值と稱するので、又

吾人の交換價值が相互に異なつて居ることが

交換取引の起る原因

である、若し各人悉く或財に對して同じ交換價值を

持つて居るならば、其處に交換取引が全然起らぬ道理である。又財の價值は其時の事情によつて強弱の差異を來すのである、甘い物に飽いた時は淡泊な物を望み、鹽辛いものに飽いた時は水を欲する、かゝる場合は飽いた物よりは欲する物は其瞬間の精神上の認識に於て重きを爲す之を

主觀的使用價值

と稱する。然るに財の吾人の慾望を充足する強弱を定

むるに、其瞬間に於ける特別の事情によらず、一般的に其財が如何なる程度に其慾望を充足するかを具體的に定むることがある、例へば等しく光と

熱と力と三つの働きを爲すも電氣と瓦斯と何れが利益多いか、又等しく滋養分を取るにしても牛乳とソツプと鶏卵とが何れが効能多いか、即ち吾人が財が直接に客觀的に吾人の慾望を充足する適否を認識するを名けて

客觀的使用價值

と稱するのである、されば財の交換價值も主觀的交換

價值と客觀的交換價值との區別がある、此客觀的交換價值は要するに主觀的使用價值の反映とする、吾人は自分の所有する財と他の所有する財と交換して間接に吾人の慾望を充足しやうとするときは、先づ自分の財は他の財と交換せらるべき價值あることを認識し、次ぎに交換せらるべき兩財の慾望充足の程度の多少を計つて交換の割合を定むるのである、假令ばア

ラスカ地方に其實例あることであるが、白雪皚々の裡に堅氷に閉された生活に於て、野菜を喰はぬ爲めに壞血病に罹ることがある、故に野菜缺乏の爲めに平常一圓のものにも數十圓を支拂ふことがある、此場合に於て其財が一般の人が果して當事者の計つた程の交換能力ありと認識するや否やは別問題である、唯交換する當時の事情により吾人の精神上に顯はるゝ輕重の念に過ぎぬ、之を

主觀的交換價值 と謂ふのである。或財に對し吾人の主觀的交換價值より離れて、社會連帶上一の財若干は他の財若干と交換する丈の能力があると認識するものがある、例へば米一石と大麥二石と交換し若しくは白木

綿二十反と交換することが普通に出來るとすれば、之が一般の社會の認識した交換能力で、之を

客觀的交換價值 と名づくる、此客觀的交換價值は又財の購買力とも謂ふのである。財の購買力とは要するに其財の社會連帶的價值である。

第四章 價格

一の財が現實に他の財と

交換するゝ割合を價格 即ち英語のヴァリユーと謂ふのである、今米一石が大麥二石と交換せらるゝ時は、米一石は大麥二石の價值の二倍に當る譯

て、前章に述べた價值は英語のウォールスのことと後篇にある物價は英語のブライヌである。前章の客觀的交換價值とは一般の社會が認識しつゝある、交換能力である、然るに價格は現實に行はれた財と財との交換割合である、尤も此交換割合は交換能力により定まるに相違ないが、此二つの觀念は全然一致するものでない。俗に或財を割安に買ふたと謂ふことは、現實に購ひ得た價格は、其財の交換價值に比して割合に安かつたと謂ふことを意味する。

價格は關係的の言葉

であるから總ての財は同時に高低あることは想像し得られぬ、なぜかと謂ふに或財の騰貴は同時に或る財の下落を意味するか

らである、此場合には必ず或る一方の財の價格は客觀的交換價值よりは少くなる。而して貨幣と他の財との交換の割合を物價即ち英語のブライヌと謂ふのである。經濟の發展の章に於て述べたやうに七古草昧の時代はブエールの所謂自足經濟で、自ら生産し自ら消費し需要、供給は同一經濟單位に行はれた、然るに世の中は進んで社會連帶の範圍が擴まり、智見も廣くなり、趣味も高尚になるに伴れ慾望も亦擴大して自己の財を多く生産し自己の消費の餘剰若しくは消費の代用の爲めに他の生産した財と交換する此場合に他の財に對しては需要と謂ひ自己の財より見れば供給と名づくるされば

消費あつて生産ある （消費あつて生産ある） もので生産あつて消費あるものではない、欲望充足の目的は消費である、消費者の需要は生産者の供給を支配するものである、而して此需要の爲めに、分配の制度も生じ交換の作用も起り貨幣も現はれ信用制度も設けらるゝに至つたのである。

第五章 分配

吾人の欲望を充足する

財の生産には四要素

即ち自然（重に土地を謂ふ、猶第三篇供給論の第一章

自然を参照）と勞力と資本の三要素と、之に第三次的要素として企業が加

はり合せて四要素となることは後編供給に述ぶる通りである、故に若し供給者が此生産の四要素を兼ね有して居ること自然經濟の時代のやうであるならば、分配の問題は起らぬ道理であるが、社會が進歩し經濟が發達すると、或は土地のみを有するものもあり、或は勞力のみを提供するものもあり或は資本のみを出すものもあり、或は専ら企業に従事するものもあつて茲に社會所得を生ずるのである。此社會所得とは人類の經濟行爲の結果たる生産額より、其活動に要した財を控除した殘額を謂ふのである、而して此社會所得の中より各人は適度に分配を受けて生活を營む、此各人の所得とは一定の期間内に新に其所有の財となつたもので之を消費しても差支

ないものを謂ふのである、即ち所得は規則正しく繰返されて其人の財となるのだから、遺産富籤若しくは贈與等偶然の收入に由る財の増加は之を所得と稱すること出来ぬ。各人が社會所得より間接或は直接に受くる

所得 が、其生産要素に比例して權衡を失するは分配良しきを得ぬ證據である、分配良しきを得ぬときは社會連帶上の均衡を失し、社會は健全なる發達を遂ぐること叶はぬ、若し多くの分配に與るものなれば勞せずして豊かなる生活を爲し懶惰放逸に流るゝ傾きが生ずる、之に反し少き分配を受くるものは生活の爲めに追はれ、社交や休養の暇もなければ營養も不良となつて勞働能率も低くなり、更に其子孫の身體迄も不健全となり、又之

此の教育を施す餘裕もなくなる。故に分配問題は實に重大なる大問題である、

社會所得の分配に與るべき階級

は即ち生産要素に關係ある階級で、當然左

の四種に分たる、

- 一 地主、其所得は地代である。
- 二 勞働者、其所得は賃錢である。
- 三 資本家、其所得は利子である。
- 四 企業家、其所得は利得である。

而して各人の所得より各人の必要な生活費のみを控除した殘額を

自由所得と稱する、此自由所得が無ければ貯蓄の餘裕もなく、將來の幸福を計ることも出来ぬから、其國の文明も産業も發達すること叶はぬ譯である。

第六章 地代

地代とは土地の生産力を使用せしむるため、

地主の受くる報酬

を謂ふのであるとは、英のリカルドの地代論に唱へら

れ、爾後經濟學界の通説となつたのである、然るに近來の學者はリカルドの説のやうでは、土地の自然力と古より之に投資した資本の生産力とを

區別することが出来ぬ、生産は土地の自然力に由る許りてなく又資本の力にも由るものであるから、地代は地主の受くる

土地の使用料

と解した方が穩當だとする。とにかく地代は或る耕地の生

産力と現に耕し居る最劣等なる耕地の生産力との差より生ずるものである其最も劣等なる耕地とは生産力少く之を耕すも生産額は之に費した資本及び勞力に對する報酬に等しく、少しも剩餘の無いもので、之を

耕作限界

と名づくる、今茲に上中下の田地あるとする、此三地共或一定

の勞力と資本とを用ひたならば上は十石中は八石下は六石の收穫がある、然るに人口稀薄の時代は米穀の需要も尠いから唯上田のみを耕すが此時は

未だ地代はない、然るに人口増加し供給不足して米價騰貴するから中田をも耕すやうになる、此上中共に同一の資本、勞力を費し上田は十石、中田は八石の收穫であるから、地代として耕作者は地主に二石を提供する、更に人口増加して米穀の需要増加せば下田を耕すやうになる、而して下田は其勞力と資本とに對する報酬のみで、少しも剩餘は無いから地代はない爲め耕作者も下田即ち耕作限界迄も耕作する、斯く土地の生産物の需要増加するに従つて耕作限界も遞降するが、此耕作限界と耕作限界以上の土地の收穫の差額、假令ば前例の下田に較べて上中の兩地の收穫の

差額は地代

となる、此剩餘の大小は地代の高低で前例の上田は四石中田

は二石の地代となる譯である。又前例の人口増加以外の原因で米價騰貴しても、限界耕作は遞降するから地代は騰貴する、其他耕地許りてなく人類居住の爲めに要する宅地の地代も同一理由で説明出来るのである。

第七章 賃錢

賃錢には二種類

ある、一は強制的の賃錢で他は契約上の賃錢である、官

吏公吏の俸給などは法令で定まつて、其間に契約なる觀念を交へぬから、之は強制的の賃錢である、契約上の賃錢は雇備報酬と請負報酬との二つに區別する。然るに此賃錢の中には賃雇の勞働者は勿論、會社員、辯護士及

び醫師等の勞力に對する報酬をも含むは勿論だが、經濟上から謂へば賃雇
勞働者の賃錢は最も主要であるから、茲には單に勞働賃錢に關する原則を
述ぶる。

賃錢の高低を來す原因

は、第一勞働者の人口の寡衆、第二勞働能率の多
少、第三社會制度の關係、第四物價の高低等いろいろの理由があり、なか
く複雑で、之を概括的に説くことは六ヶ敷い。第一需要供給の權衡を得
なければ物價の平準を得ぬ如く、勞働者の數が其國の企業に對し多とか
少ないとかによつて、原則として賃錢に高低を生ずるは謂ふ迄もない、併
し人類社會は複雑であるから此原則には幾多の障得あるので、現實の經濟

社會の有様は一見明白ではない。第二の勞働能率即ち同じ時間に同じ仕事
を致しても勞働効程に相違がある、之によつて賃錢の高低あるのも當然で、
彼の英國の勞働者は勞働能率の高いので世界で有名であるが、賃錢も亦從
つて高いなどは此實例である。第三の社會制度の關係は六ヶ敷い問題であ
る、勞働者は企業家と契約關係であるが、企業家の雇傭を解くは唯事業一
部の中止若しくは擴張の中止に過ぎぬが、勞働者の賃錢を得ぬは死活の問
題で決して對等關係には行かぬ、そこで國家は最低賃錢の制を定むるとか
勞働時間を制限するとか、強制保險に附するとか、工場制度で衛生上の設
備に注意するとか、いろいろ保護干渉をなす、又社會一般に社會連帶の法

則を自覺し労働者保護は労働能率を増進し、一國の生産増加の最大原因であることを認むるやうになれば、賃錢問題も亦新生面を開いて來るたろう。第四の物價の高低は原則として賃錢の高低を來すべき筈であるが、労働者は弱く又受け身であるから、物價が高くなつたとて、賃錢を引上げる譯に行かぬ、併し他の障碍のない限り、長い間には必らず物價の高低は賃錢の高低を來す一つの原因となる。猶茲に注意を要するは

労働者 剩餘

即ち労働者の自由所得のある賃錢でなければ、其經濟社會の生産力は衰へ健全な發達は出來ぬと謂ふ事である、労働者剩餘とは労働者が其賃銀より現實の衣食住の費用を支辨したる剩餘で、此剩餘がなけ

れば労働者が將來の幸福の爲めにする準備も出來ず、子弟を教育し若しくは社交とか娛樂とか精神の修養とか身體の休養とか總て不可能になる、斯くなれば傭主から見れば一時低い賃錢で労働者を使用しても、労働能率が低くなるから終局高い賃錢となる場合がある、更に之を社會連帶上より觀察すれば、労働者の能率低下は經濟上莫大なる損失であるは謂ふ迄もない、故に賃錢は原則として労働者剩餘を有する賃錢でなければならぬ。

第八章 利子

利子とは資本を有する者が其

資本の使用に對する報酬

として受くるもので、地方の農家の間で米四斗入
壹俵を借り入れ、秋の收穫後に三升乃至五升の利子を附けて返濟するなど
は此例である、金利とは貨幣に對する使用の報酬であるから利子より範圍
が狭いが、現時の經濟社會に在つては重要なるもので、普通利子と謂へば
金利を意味するから、茲には主として金利に就て解説する。

利子成立に關する學說

に左の四説ある。

第一生産説、資本其ものは既に生産力を持つて居る、之を利用することは
其生産力を利用するものであるから、之に報酬を拂ふは當然とする。
第二捨樂説、資本は過去の勞働の結果で、若し其當時享樂のために之を使

用し盡せば資本は生ずる筈がない、故に資本を供給すと謂ふは自己の樂し
みを捨て慾望を抑へ、他人をして之を使用せしむることを意味する、故に
此樂しみを捨てるのに對して報酬が生ずる。

第三勞力説、總て勞力は報酬を受くべきものであるから、過去の勞力の結
果たる資本に對し、報酬を受くるは當然とする。

第四價值説、埃太利學派は價值論から利子を説いて居る、總て現在の財は
將來の財よりも價值が多い、然るに他人に資本を利用せしむるは、價值の
多い現在の財を貸し價值の少い將來の財を返却せしむるのである、即ち此
減少したる價值を填補するを利子とする。

以上四説共に、人により時により資本によつて生産力、享樂、勞力若しくは價值が異なつて居るに、何故に利子が一定の率あるやを解決せぬ缺點がある、吾人の見る所によれば需要供給の關係に比例し、自然に物價は一定し或は地代が一定するやうに

一定の利率 が現はるゝので、利子(重に金利)とは貨幣と謂ふ一種の財を使用する使用料と解すべきものである、従つて土地の使用料たる地代と同様に、需給に比例して高低あるは當然である、唯茲に注意すべきは

利子と地代とは反對の傾向 ある點である、資本は社會の進歩に伴ふて集積さるゝから、利子は漸次遞降の傾向があるが、土地には限りあつて人口の増加

に伴はぬから、地代は社會の進歩に伴ふて必らず騰貴する。而して一國の財若しくは財の一部たる通用貨幣が膨脹するも、若し其國民は奢侈のために浪費するときは、之を資本として

生産に利用 すること尠ないため、資本が缺乏して利子は騰貴する、又國民の氣風活潑で企業心に富み資本の需要多い場合も利子は騰貴する、然るに利子が騰貴するときは、通貨として社會に轉帳してあるものは銀行に集まり、之が資本となつて生産に利用され、利子が低落する、斯く或る時期の間に利子の高低あるは、社會連帶的調節とも謂ふべきもので、經濟上の重要にして趣味ある一作用である。又政治經濟の組織が進歩し、生命財産

益々安固となり、國民の貯蓄心が大に進み、資本の集積に便利になれば大體に於て利子が低落す。傾向がある。

第九章 利得

土地あり勞力あり資本あつても企業がなければ、今日の經濟組織に於ては生産が行はれぬ、即ち

企業は土地、勞力、資本を統合

し所謂第二次的生産要素として、供給の要因

たることは後章に説く通りである、而し地主、勞働者及び資本家などの社會所得に與ること出来るは企業家のある爲めて、又企業家は自己の危険計

算で生産力を統合し、供給の主働者となるものであるから、之に對して報酬を受くるは當然である、之を

利得とも利潤とも名づくる

。而して企業家の慾望充足は利得によつて其目的

を達するのであるから、他の分配問題と共に之を需要論に於て講究すべきである、利得とは企業から生じた總收入の中から、之に要した總ての費用を控除したもので、若し經濟市場が、其豫見した通り需要と供給との調節を得たならば利得が多いが、然らざる時は却つて損失を招くことがある、然るに地代と賃錢と利子とは一定して居るから、危険の度も尠く、殊に是等は生産物の賣捌かるゝ以前に企業家より支出せらるゝ場合が多い、生産

上第二次的生産であるに係らず企業の經濟上重要なる地位を占むる所以は茲に存するのである。而して企業家の

企業利得に差異を生ずる原因

は左の通りである。

一 企業の快否 企業の種類によつては之を營むを喜ぶものと然らざるものがある、假令は銀行業とか交通機關の事業とか謂ふものは、多數人の喜ぶ事業であるが利益が尠ない、併し葬儀、屠獸若しくは塵芥取扱の如きは人の喜ばぬものであるから利益の歩合は高いのである。

二 企業の安否 企業家は其報酬を未來に期するものであるから、多少危険を冒さねばならぬは理の當然であるが、企業の種類によつては比較的安泰

なものとは危険なものがある、假令は需要廣くて變動少ない日用品は安泰な代りに利益も少ない、出版物とか流行品とかは需要不確實で危険であるから利益も多い。

三 企業の技倆 企業は需要を察し供給をして之に適應せしむるものであるから、變通の才と先見の明とを要する、斯る人は比較的多くの利益を占むる、又其人の才能及び經驗で生産又は賣捌の方法を改良し生産費を減じたならば多くの利益を占むる、つまり企業利得の多少は企業家の技倆に大關係あるは謂ふ迄もない。

併し以上何れの原因によるに係らず、一の企業の利得割合に多い時は

利得平準の作用が顯はるゝ、假令ば其生産物に利益多いときは、交通機關發達の現今に於ては遠方若しくは海外より同一の商品若しくは代用品を輸入し、需給の調節を計るか、若しくは他の企業家を招致して同一事業に従事せしむるやうになり、企業家は法外の利得を永く壟斷することが出來ぬ、即ち物價の原則と同様利得平準の作用に制せらるゝ、之は社會連帶の法則上必然斯くあるべき筈である。

第二篇 供給論

生産の要素たる自然(重に土地)勞力、資本、企業と其生産作用及び交換は總て供給の體現である。元來人類は有形物を創造する能力がない、唯自然の物質を

慾望充足に利用する處に價値が発生し増加するのである、此價値の発生及び増加を名づけて生産とする、故に自然の貨物の形態と性質とを變化し價値の發生を爲す農工業は生産であるが、自然の物質或は農工業の生産物の位置を移動して、價値を増加する商業運輸業も亦生産である、要するに

生産とは社會連帶上財の利用を生ずるのであるから、通説による

交換は一種の生産

である故に、生産要素の土地、勞力、資本、企業の性

質と及び交換の作用と其關係事項とを供給論に於て説明する。

第一章 自然

自然とは土地、材料及び勢力

の三つを謂ふのである、農業に於ける田畑、

漁業に於ける河海、若しくは商業用地のやうな生産に必要な土地と、動物、植物、礦物などの生産に必要な材料と、及び水力、風力、火力或は瓦斯、蒸汽、其他植物の生長力、動物の播殖力、土地の培養力など

の生産に必要な勢力とは總て經濟學の所謂自然である、其中土地は最も重要なものであるから、自然を總括せずして單に土地のみを擧ぐる學者もある。尤も吾人は自然を土地のみに限定する學説には反對であるが、今日の處では土地を除いた他の自然の生産要素の説明は、多くは常識論に過ぎぬから、其等は簡略して茲に

土地

のみを説明する、土地は一定の面積があつて人力で動かすことが

出來ぬは、生産要素の中の勞力や資本に無い特質である、此面積と理化學的成分とが合したものは、土地の豊度となり、此面積と外圍の關係とが合して土地の位置となるので、又此豊度と位置とは土地の生産力となるので

ある。土地の豊度は之に放下する資本及び之に用ゆる勞力が加はるに従つて増進する、併し或程度までは資本及勞力の増加に伴ふて豊度が増進するが、或程度以上になると其割合に増進せぬこととなる、之を

報酬遞減の法則

と名づくる、假令ば一反歩の田地に二人の勞力を費し

二石の收穫があり、三人にて三石の收穫があり、四人にて四石の收穫があつて、一人一石の割合であるが、此程度を超へて五人の勞力を費せば收穫は増加するも其割合は減少し、收穫は四石二斗となるから一人八斗四升となる、尤も土地の生産力は豊度と位置とより來るものであるが、位置は人力で左右すること出來ぬもの故、土地の報酬遞減の法則は土地の豊度に對

して行はるゝのである。

土地の位置

は生産上重要な問題である、氣候とか港灣、山川の分布と

かは、人文の發達にも影響あり、従つて經濟上にも大關係ある、氣候溫暖の土地は自然物豊饒で、僅かの勞力でも生産物を得る、之に反し寒帶地方は自然の恩恵が乏しく住民は唯生活の資料を得るに忙はしい、温帶地方は衣食住の計を爲すに困難でも、自然物は相當にあるから住民が勤勉となる、是等は經濟發達に興味ある關係問題である、又港灣、河川の多い處は早く貿易が發達するから、其經濟組織も亦貿易關係で發達する、併し此土地の位置は大體に於て人力に左右すること出來ぬものである。而して

報酬遞減の減輕

は四つの人爲作用で出来る、其四つの人爲の作用とは人類の身體、才能及び道徳などの進歩は、労働能率増進となること其一つである、農作法及び肥料改良若しくは農具機械の改良發明其の二つである交通機關の改良により農産物輸出又は市場運搬の便利を増加すること其三つである、社會制度の發達即ち所有權の保護、財産の安固などにより損害の減少すること其四つである。併し此四つの人爲作用で出来る報酬遞減の法則の減輕は程度がある、絶対に此法則の働きを除くことが出来ぬは勿論である。

第二章 勞力

勞力とは生産に用ひられた人類の體力及び心力の總稱で、社會連帶の法則が最も顯著なる問題とする、此勞力には勞力の數量と勞力の能率との二つの問題がある。

勞力の數量

は其國の人口中生産に關係ある人數を謂ふので、人口の増加は大體に於て労働者の増加となり、労働者の増加は勞力の増加となるから、労働者増加の法則は人口増加の法則に外ならぬ。されば往時は各國共人口の衆きは國家富強の基なりと信じて、百万人口の増加を計つたのである

るが、彼の有名な英のマルサスは此説を排斥し、人口は素りに増加すべきものでなく成るべく制限すべきものである、即ち生兒を充分成長さす能力のないのに人口を増加さすは、必らず避くべき事て是即ち道德的の豫防方法である、又此

マルサスの人口増加の法則

は有名なものである、其説によれば人口は他に之を障碍するものなければ、二十五年に二倍となり、漸次等比級數を以て増加するが食物は僅かに等差級數で増加するに過ぎぬ、故に人口の増加は食物の増加の程度に於て制限を受けねばならぬ、彼の天變地異、戦争、饑饉過度の勞働、不完全なる育兒法などが人口増加に障害を與へる爲め、稍々

食物の不足を防ぐこと出来るのであると。此マルサスの人口論に對してはいろ／＼の反對説がある、殊に人口と食物との増加の割合はマルサスの謂ふが如きものでないが、とにかく人口と食物との調節を得ぬ、即ち食物は人口増加の割合に増加せぬことは動かすべからざる事實である。

勞力の數量に就て注意

すべきは、總ての人口の増加は勞力の數量を増すものでなく、無爲徒食の徒、幼少のもの或は老弱のもので勞働する能はぬもの即ち不生産者階級の増加は、勞力の數量を増さぬのみならず却つて其國の消費を増すのみである、之に反して生産階級即ち中壯年者の衆くあるは其國の勞力の數量を増加することである、次ぎに企業家の勞力の能率

は複雑で一定の法則に律する譯に行かぬ、殊に企業の成績は勞力の能率よりは事後に其成敗の結果によつて判断し、勞力の能率は問題外とするが故に、

勞力の能率

は通常勞働者階級に對する問題とする、されば之を勞働能

率(或は勞働効程)と謂ふのである。勞働能率の多少は一は内部關係より生じ、又一は外部關係より來る、内部關係とは勞働者其自身に能率の高い勞力を備はらせること、勞働者の熟練、健康、徳義、智識等に原因するのである。外部關係とは社會制度の爲め勞働能率を高めるので、工場の設備が良く彼等の勞働に便利で健康上にも宜しいとか、自由所得のある賃金を貰

ひ得るとかを謂ふのである、其中最も勞働能率を増加するものは分業の制度であるから左に之を述べやう。分業には國際分業と國內分業との二つある、

國際分業

とは國家の位置、氣候、産物が不同で、國民の才能、技藝

又異なるつて居る處から、各國民は各其長所とする財を生産して、他の國民の生産した財と交換する、此國によつて異なる生産に従事する有様を稱して國際分業と名づくるのである。國際分業の特色としては國內の地方的分業と異り、外國は言語、風俗、法制の不同、愛郷心及び外國人と意思疏通せぬ等の原因から、假令賃金高くも勞働者は容易に外國に出稼せぬ、又假

令金利が高くとも資本は外國に流出すること困難である、即ち國內の地方間に資本及び勞力が自由に移動するやうな譯に行かぬ。

國內分業

には又二つある、即ち地方的分業と勞働分業とて、地方的分業とは同一國內でも地方特種の關係で、假令は陸地の四方八達の土地たる米國シカゴ附近は農産物の集散地となり、又各國の良港は外國貿易地となり、山間には水力電氣が多く起り、又土味によつては果樹栽培専門の地方もあり、都會附近は蔬菜栽培地となる實例を見ても分る、又國內分業は國際分業よりも比較的に勞力と資本との移動が自由である、而して

勞働分業

とは通説の所謂分業で、各自が勞働するに當り結合して各自

の分擔を定めて生産に従ふときは、假令各自の勞働力が同一でも其結果は優良である、是實驗上から勞働分業の發達した所以である。又勞働分業は古代國際間に行はれたものもあつたが今は殆ど國際間の分業と名づくべき程のものはない。此勞働

分業が勞働の効果を増加

する理由が四つある、第一に勞働分業は假令は天性畫に長ずるものは畫家となれば、他の仕事に就いたよりは地位も報酬も高いと謂ふ如く、各人は技藝、能力の上に長短あるから、此各種の勞力を最も有効に使用せしむることを得るのが、是其理由の一つ。各人は毎日同一の業に従事するから其業の熟練を増す是其理由の二つ。同一の業に智

識、經驗を重ねるから、其業の改良發達を計り得ることは其理由の三つ、一人にて異なる勞力に従ふ時間及勞力の消費を節約する是其理由の四つである。併し天下の事一利のある處には一害の伴ふあるは免れぬ數である、勞働分業即ち通説の分業は、斯く生産を増加する利益あるが、

分業に伴ふ弊害

は、社會連帶の利益上必ず排除せねばならぬもので、

其弊害とは第一勞働分業は各人の能力を一方に傾かしめ殆ど不具者同様となす、假令ば幼少から左官の弟子となり或は活字拾ひとなつたものは、生きた左官の器械や活字拾ひ機械となつて、全く他に通用せぬ人間となる、第二經濟は變化著しいもので、其從事する業の廢れることあるも、勞働

者は勞働分業の結果不具者となつて居るので、他の業務に不案内で衣食に窮することがある、又企業家は新らしい事業を起すも勞働者を得るに苦しむ、是等の

弊害の救済方法

は、(一)勞働者に普通教育を授くる。(二)工場等に於

ては一つの仕事にのみ使用せず、其専門以外即ち時々他の仕事に従はしむる、(三)勞働時間を適當にし其餘暇で肉體及び精神上の慰安を與へて勞働能率を増さしむる等之である。而して分業(國際分業及國內分業)は社會連帶の法則の體現で、其顯著なるもの、一である。

第三章 資本

財とは過去の勞力の結果である、而して

所得を生ずる爲めに貯蓄された財を資本

と稱する、故に生産の要素の起源から

見れば、天然と勞力とに次いで資本が起り、更に企業は最後に生じたものと謂ふべきものである。抑も人類が勞力を自然に加へて生産するも、其結果は悉く直接に欲望を充足する爲めに消費するものでない、其一部分を貯へて他日の欲望充足の爲めに供ふるか、若しくは所得を生ぜしむる爲め、即ち生産の爲めに用ゆるかの二途に出るやうになる、此後者の所得の爲めに

用ゆる貯蓄された財は資本と謂ふのである、社會連帶の法則から見れば、人類は當然資本を貯蓄すべき筈であるが、どうも之にはいろいろの故障がある、然らば

貯蓄の行はるゝ條件

は如何と謂ふに左の二つである、

第一貯蓄をなし得べき餘裕あること、吾人が社會に立つ以上は同類意識を重んじ、其地位に應じて生活を遂げつゝあるのである、若し其收入が此生活費を支へて剩餘ない時は、如何に貯蓄心強くとも之を行ふこと出来ぬは謂ふまでもない、而して此貯蓄の餘裕を生ずる原因は一は適當の租税である、税率高きに過ぐる時は國民に自由所得がなく貯蓄をなす餘裕がない、二は

其國民の勞働に對する尊敬の念の多少である、之は直に勞働能率にも勞働數量にも關係あるものである、三は其國の風俗である、假令ば我國封建時代の如き世襲の家祿があるから、金錢を賤しむ貯蓄を念頭に置かぬ風があつたやうなことは、到底其國の資本の増殖は期することが出来ぬ。

第二貯蓄の意思あること、自由所得即ち支出を償ふて餘裕ある収入でも、吾人は將來を慮らずして之を貯蓄する意思がない時は、貯蓄の行はるゝ謂はれがない此貯蓄の意思の有無若しくは強弱は四圍の事情に關係あるものである、戰爭或は疫病が長く續くとか又は社會の安寧秩序が紊亂して、生命財産の安固を期し難いとか、或は従事する職業が確實でなく浮沈常なら

ぬ危険性のものであるとかの事情あれば貯蓄心が無くなるか若しくは弱いのである、又貯蓄は遠きを慮り己れに克つ精神より起るものである、然るに思慮の浅い人若しくは野蠻人は現在の慾望を制して將來の爲めに備ふるところが尠ない、従つて思慮深き人若しくは文明人と思慮深き人若しくは野蠻人とを比較して見れば、貯蓄心の強弱に大なる徑庭あるは免れぬ事實である、既に冒頭に於て説明したやうに資本とは所得を生ずる爲めに貯蓄された財であるから、財其ものに資本たる固有性あるものでなく、唯其用途によつて區別するに過ぎぬ、假令は自家の食用の爲めに小麦粉を買入れて消費したが、中途で思ひ直して商賣の爲め菓子製造に使用した時は、即ち此

菓子製造に使用した残部は資本に變動したのである。
而して

資本の分類

に就ては之を固定資本と流動資本との二つに分つことはマダムスミスの唱へた所で今日猶此名稱は用ひられるが、併し學者によつて解釋は異なつて居る、又マルクスは可變資本と不變資本との二つとし、最近國の資本學説で有名なポエム、バザエルクは、個人資本と社會資本とに區別したが、未だ定説となつた譯でないから茲に其説明は略することとした今日の通説に従へば

固定資本

とは家屋機械のやうに財の生産に際し、漸次減損するが一回の

使用では消費せぬもの、流動資本は貨幣とか其他生産用の消耗品即ち石炭、油とか一回の使用のみで消費さるゝものを謂ふ、尤も貨幣は消耗品と異り之を使用するも社會的に存在し、轉帳流用さるゝものであるが、之を使用したのから見れば兎に角一回毎に所有權から離れて消費状態にあるものであるから、之を

流動資本

とするのである、元來生産とか消費とか謂ふも唯其形態位置の變化で決して絶對的のものでない、人類は唯天然物を利用變動するに過ぎぬものである而して經濟社會は社會連帶の利益上

固定資本と流動資本との權衡

を保つに注意を要する、固定資本は他に流用し

難きものであるから、多きに過ぎる時は、流動資本の縮少、利子の騰貴となり、物價下落し企業利得少くなり社會は不景氣となる、之に反し流動資本多きに過ぐる時は物價騰貴し企業利得は多くなるが、賃錢は直に物價の騰貴に伴ふものでないから、一時労働者は大に困窮する、又企業家は利得多きに眩惑し事業を起すこと頻々となり、惹いて投機熱の熾烈となり信用制度の破壊となり、却て一國の生産を萎靡せしむることあるから注意せねばならぬ。

第四章 企業

企業とは自己の計算危険

に於て財を生産する爲に自然、勞力、資本を統合するものである要するに第二次の生産である、此自然、勞力、資本、企業の四つの生産要素が適當に働いて始めて需要、供給の權衡を保つことが出来るのである。現今企業は資本家の營む場合多いが、之は地主自ら耕作する場合と同様である、地主と小作人とあるやうに資本家と企業家と分れて居る場合もある、即ち才幹ある者は自ら資本を有せぬが他人から資本の融通を受け企業を爲すことが出来る、現今の經濟社會に於て最も重要な位置を占むるものは寧ろ自身が資本なくて、他人の資本を利用して經濟行爲を爲す者である。又資本を有するものは自ら之を運用せず他人に之を運用せし

めて相當なる利益を收め能ふ處より

資本家と企業家と區分さるゝ傾向

が著しくなつた、殊に複雑極まる現今の經

濟社會にありては需要供給の調和が困難で、此間に處して利益を收めんには大なる危険が伴ふのである、故に多く財を有する者は英米に於ける如く之を信託會社に委託するとか、確實なる株式會社の株券を持つとか、或は間接の企業投資とも見るべき銀行預金となすとか、何等かの方法に據つて危険の伴ふ企業を兼ねることを避くるやうになる。然るに企業家は企業之才幹あり又常に經濟社會の狀況に注目して居るから、商工業何れの方面の企業にせよ才幹なき資本家自ら經營するよりは結果が良しい、併し企業家

は常に需要の範圍と程度との二つの豫測即ち

二つの企業的危険

を冒しつゝあるのである、即ち自己の生産物は如何なる

方面に需要さるか又幾何の分量を需用さるか、之が爲には一般人の慾望と競争者の生産額とを見積つて、自己の生産額を加減し成るべく確實に利益を收むることを考へねばならぬ。元來此豫測なるものは困難なことであるから企業家の供給と社會の需要とが調和を破ることがある、而して需要が供給よりも過多なる時は、物價騰貴となつて事業熱が勃興し従つて金利が騰貴する、之に反して企業家の生産が社會の消費よりも過多なる時は物價下落し産業萎靡し、従つて金利下落する、此後なる經濟上の現象を稱

して

生産過多

即ち英語のオヴァー、プロダクションと謂ふのである。即ち企業者の多くは信用で原料を仕入れ、製品の賣捌を俟つて原料の供給者に支拂ふを慣例とするが此生産過多の場合には賣捌に困難であるから支拂を爲すこと六ヶ敷い、或は又投賣即ちダンピングを爲すこともある、そこで經濟界に大動搖を來すを常とする、生産過多の弊害の救済は一方には銀行若しくは資本家が或程度まで一時企業家に資金の融通を爲して流動資本の缺乏を補ひ、一方には企業家は自ら其生産を減少し需供の權衡を保つに努むるにある。

企業の種類

は之を小企業と大企業との二つとする、小企業は企業家が労働者を兼ねるので生産要素中の勞力が重きを占むるもので、偶々補助人を使用するも補助人は企業家と同階級で同一の場所が多くは同一の道具と共に労働する、大企業は之に反し企業家と労働者との分界が明かに區別され企業家は企業のみで労働者と共に労働に従事することがない。英米のトラスト獨逸のカルナルなどは大企業中の大企業で、普通の會社組織のもの及び個人の經營でも大企業たる性質のものが尠くない。

大企業の利益

は小企業に比し、分業が行はれ易くて利益が多い、又資本潤澤であるから機械を改良して生産費を減じ、又信用も比較的厚いから資

本の融通も都合よく運び、原料仕入にも分業が澤山であるから幾何か廉價で且つ延取引も出来る、而して其生産した財(貨物)を運送するにも運送業と特約を結び運賃が低廉なるを得る次第である、併し大企業は悉く小企業を壓倒し去る譯のものでなく、小企業には又

小企業の長所

があつて堅實に存在しつゝあるのである、地方避遠の地では各種の貨物が澤山需要さるゝものでないから、少量のものを遠く運ぶは不利益である、かゝる貨物は各地方に小企業の經營の下に生産さるゝ、又美術品其他技巧を要するものは大工業に適せぬから小仕掛で製造さるゝ、其他大工業で未製品とした物を精製するとか、或は製造品の修繕假令は時

計、靴等の修繕などは大工業に適せぬは謂ふ迄もない、併し資本は集合すると其効果は多くなるが、個人の資本には限りあるので、資本を有する者が多數相集まりて資本勢力并に信用を結合して企業をなすに至つた、各種の

會社組織

は即ち是である、されど會社の企業は定款總會の決議など種々の制限を受け、其業を営み事を處するに當つて敏活を欠き機會を失する場合がある、是れ個人企業に比して不利なる點である、其他個人企業と會社企業との比較は前述の大企業と小企業との利害長短と同様である、我國の商法では會社には合名會社、合資會社、株式會社及び株式合資會社の四種

を規定してある、斯くの如く會社は重に資本の集合を目的とするものであるが、更に企業の合同によつて小企業は大企業と同一の利益を收むる組織がある、即ち

産業組合組織

は此目的より起原したものである、我國の産業組合は明治三十三年の産業組合法に規定されてある通り、信用組合、購買組合、販賣組合、生産組合の四種とする。思ふに輓近世界各國に於て、産業の發達を計り自由競争の弊害を除く爲め、産業組織や企業經營の研究が盛に行はれて居るが、此弊害は人類の智識の未だ發達せぬ處から來た缺陷で、即ち人類の天性が無智の雲に掩はれ、社會連帶の法則が、障害を受けた結果と謂

はねばならぬ、併し經濟社會が發達し又企業に關する研究が進歩せば社會連帶の法則が現實さるゝだろう。

第五章 交換

供給の體現たる生産とは價値の發生及び増加を謂ふので、交換は即ち生産の一部で、

價値増加の作用

を指のである、通説によれば交換は生産でないとするが此通説の却つて穩當でない理由は既に第三篇の冒頭に説明した通りである交換とは自己に必要な財若しくは必要少き財を他人に給付し、反對に自

己に必要なる財若しくは必要の大なる財を受くるので、つまり價値の増加を謂ふのである、原始時代に在つては人々自ら必要とする財のみを生産し、毫も他人の爲めに生産することがなく、社會連帶の關係が薄くあつた、人智が進歩し社會が複雑となれば慾望も増加し向上し、自己の慾望を充足して剩餘ある時、若しくは自己の生産した財よりは一層必要を感じた他人の生産した財と交換し、有無相通するやうになるのが交換の起源である。而して經濟の進歩した今日では、獨り價値の發生即ち農業工業ばかりでなく價値の増加たる商業、運送業等何れの生産でも多くは他人の爲めにするの社會連帶の作用が顯著となつた、此他人の爲めにするとは交換の必らず

伴ふことを意味するものである。交換の起る要素に分業、私有財産制度及び營業の自由の三つある、分業の交換に必要であるは既に説明した。

私有財産制度

は上古に於ては絶無で、土地を始め有ゆる財は部落の共有であつたが其後牧畜發達し家畜の私有財産制度起り、其れより發達して土地私有の制度となり、漸次他の財産にも私有制度が成り立つて來た、若し是等の私有制度が無いならば有無相通する現象を見る事が難いだらう、
又

營業の自由

に就ては上古より近世に進むに従ふて自由の範圍が廣くなり獨立發展の自覺を各人が有するやうになつた、昔は或は外國人と消費者が

直接に取引することを許されぬとか、或は穀物、鹽等の日常品の取引には幾多の制限を受くるとか、或は都會以外に工業を起し其工業品を直接に田舎の消費者に賣捌くを禁ずるとか、各國何れもいろ／＼營業の自由を束縛したこともある、是業は皆交換の作用を妨害したことは明白である、尤も今日として營業は絶対に自由とは謂ふこと出来ぬが、原則としては營業の自由を認めて居る、此營業の自由なる精神は近代に至つて鮮かに現はれて、最近經濟上の一大特色となつて居るのである。

第六章 貨幣

獨のヒルデブランドの所謂自然經濟時代は物々交換であつた、然るに此物と物との交換では、人類の慾望が増加向上し社會が進歩複雑となるに伴れ大に不便を感じ譯に行かぬのである、此

物々交換の不便

は第一需要する財を所有する者を相互に知ること困難であ

ること第二假令之を知るも距離遠隔の爲め若しくは其財が腐敗し易いとか運般か六ヶ敷いとかの爲めに交換するに不便なこと、第三交換の割合即ち價格を定むるに困難なこと等の故障があるのである、是に於て此不便を除く爲め交換者は直接に其慾望を充足する財でないが、何時でも自己の需要する他人の財と交換し得る財、即ち社會連帶上認めて貴重なりとする財

を**選**びて**交**換し置き、之を以て其慾望を充足するに至るのである、此財を貨幣と名づくるが、

貨幣の起原

は前説の如くて普通の財と本来の性質を異にするものでない、故に歴史を見れば昔は國によつて毛皮（上古支那の白鹿の皮の如き）貝（上古の支那の貝幣、亞米利加印度人のワンバムの如き）穀物（我日本の上古に實例ある）其他牛馬、奴隸（東洋西洋共に其例がある）等を貨幣としたものもある。而して

貨幣の職分

の重なるものは、交換の媒介となつて物々交換の不便を避くること其一である。價格の尺度となる即ち交換さるべき總ての財の共通の

尺度となり其價格を定むる、之が實例を擧ぐれば米穀を貨幣とした場合に絹布一反が米三斗である、馬一匹は米一石五斗であるとするが如き其二である、貨幣は價格の標準である、物價は常に變動するものであるから前記の絹布五反は馬一匹の價格であるから、絹布五反借りたものが馬一匹を返却する約束をするとせよ、若し馬の價格が騰貴して絹布六反に相當するに至らば、馬一匹を返却せば絹布一反丈債務者は損失する計算である、故に其當時社會連帶上貴重する米穀を貨幣として標準を立て、一石五斗を支拂ふことは相互に利便なることは其三である、貨幣は價格蓄積の用を辨ずる、此價格の蓄積とは價格の代表と同一意義である、貨幣は如何なる財と

も交換し得るが故に、之を蓄積するか若しくは銀行預金となし置かば、何時にても吾人は慾望の充足を得ること其四である、貨幣は以上の經濟上の職分を盡すが爲めには、社會連帶上適當の性質の材料を選ばねばならぬ其

貨幣に適當なる性質

とは(一)社會一般に尊重せらるると、(二)性質の變更なきこと、(三)運搬に便利なること、(四)同質のものなること、(五)分合の容易なること、(六)價格の變動少きこと、(七)識別し易きこと等である、されば昔は種々の財を貨幣としたが現今は貨幣と謂へば重に金銀貨幣を指稱するやうになつた、貨幣は國民經濟上極めて重要なものであるから、何れの國家も貨

幣の容積、形状、重量、品質等を

法律の力で制定

し、一定の購買力と強制通用力とを與へ、取引の際に安んじて貨幣を受授することを得せしむるを原則として居る、されば昔は一人に貨幣鑄造を許した國もあつたが、現今は何れの國家も政府が鑄造を營むこととなつた、若し一人に鑄造を許すときは私利の爲めに粗悪なる貨幣を鑄造して財界を紊亂せしむることがある、又假令一人の鑄造でなくも昔は政府が現在流通しつゝある貨幣よりも更に粗悪なる貨幣を鑄造して財界を攪亂した歴史上の實例もある、人或は優勝劣敗の理で一人に鑄造を許すも粗悪なる貨幣は排斥せられて淘汰を受くべしと謂ふものもあるも苟

も貨幣たる以上は善悪兩利共同一の購買力と強制通用力とあるから、世人は其取引に際し粗悪な貨幣を通用し、善良なる貨幣は之を地金にして賣るも利益あるから必らず手許に收めて置くこととなる、是貨幣は他の財と異り直接人類の消費の目的となるものでなく、重に交換の媒介たる使命を有して居るからである、斯く金融界から粗悪なる貨幣は善良なる貨幣を驅逐すれども、善良なる貨幣は粗悪なる貨幣を驅逐することが無いとは、英のグレシヤムが始めて學理的に唱道したので之を

グレシヤム法則

と謂のである、現今各國概ね自由鑄造を許して居る、即ち國家は一私人に貨幣鑄造を許さぬが、金銀塊等其國家の本位貨幣の地金を

提供し、鑄造を請求する権利は之を認むるのである、即ち本位貨幣は額面價額と實質價額と同一であるから、國家は一私人の請求に應じ、何時にても又幾何の分量でも鑄造する、之を

自由鑄造

と謂ふのである、補助貨幣は額面價格と實質價格と同一でないのみならず、補助貨幣は常に金融市場の状況により需給を調和する爲めに鑄造の伸縮頻繁であるから、自由鑄造を許さぬのである。又何れの國家でも貨幣政策上

價格の單位

を設けて居る、我國の一圓、英の一ポンド、米の一ダラー、獨の一マーク、佛及伊の一フラン、澳の一クローチ露のルーブルなどは

である併し之は單に價格の單位で即ち稱呼上の基礎たるに過ぎぬから、必ずしも價格の單位に相當する有形貨幣が存在する必要はない、而して貨幣政策上注意すべきは前述の貨幣として最も適當の材料を撰擇して本位制度を定むることである現今各國何れも

金本位制 金本位制の國は准支那一國のみとなつた、又金銀複本位など謂ふことは單に歴史上に残つて居るのみで、現實に此制度は見るべからざるものとなつた。

第七章 物價

物價とは貨幣の稱呼

を以て言ひ顯はされた財の價格で英語のプライスは是

である、其高低は需要の多少によつて定まる、即ち需要供給の權衡を保つ間は物價の高低なく平準を得る譯である、而して需要と謂ふは消費者の需要で、生産者又は商人の需要は消費者の需要を基とする第二次的需要に過ぎぬ斯く物價は需供の關係で定まるものであるが、之は長い間の大勢と其結果とを謂ふので、物價の高低の波動は常に止まぬものであるから、社會連帶上此物價の變動をして成るべく小に且つ不規則ならしめぬやうに努めねばならぬ然らば

物價の高低の原因

は何によつて起り來るかと謂ふに、需給の調節より來る

は勿論であるが、此調節の緩急の作用は財其物より起ることもあり或は貨幣其物より起ることもあるのである、財（商品として取扱はる財は普通貨物と稱す）より、起る物價の高低は、財の種類によつて異なるのである、其種類とは第一生産を割合に増加せず随意に生産し得べき財、第二生産は出来るが之と同時に割合に多く生産費を増加せねばならぬ財、第三全く新に生産なし能はぬ財若しくは随意に生産なし能はぬ財。而して第一種の生産費を割合に増加せず

随意に生産し得べき財は普通の貨物で工業品などは其最も見易いものである。此財の價格が若し生産費より尠いときは之を生産する者は損失する故

他の生産に轉じ、供給不足となるから其價格は騰貴することになる、若し又此種の價格が生産費より著しく多いときは、之が生産者は大に利益を占むるから外の生産を捨て、此財の生産に従事する者多くなる爲め、其結果此財の價格下落となる、假令又生産者の數が増加せぬまでも此種の財の價格に高低あるときは、生産者は機械の一部の運轉中止か操業時間の短縮等によつて供給の權衡を保つに容易である第二種の生産は出来るが之と同時に割合に多くの

生産費を増加せればならぬ財

は假令ば農産物やらのもので需要に應じて生産を増加すること出来るが、報酬遞減の理で生産費の多くなつた割合に收

穫とが増加せぬ、然しからざれば地方ちりやくの稍劣せうじやくつた土地とちを耕たがさねばならぬから是亦これまた割合わりあひに多くの資本しほんと勞力らうりよくとを要えする、従したがつて在來ざいらいの土地とちも亦地代騰貴またちだいとうきするから、かゝる財さいは最も生産條件せいさんじょうけんの劣おとつた土地とちの生産費せいさんひが價格かかくの標準ひょうじゆんとなるので、大おほひに普通ふつうの工業品こうげふひんと其性質そのせいしつを異ことにするのである、第三種だいしゆの

供給きやうきやうに限りある財さい

は例たとへば古人こじんの書畫名人しよゑゑいめいじんの製作品せいさくひん或は數百千年ねんを經へた古

本等ほんとうは今日如何こんにちいかに多くの資本しほんと勞力らうりよくとを費つひやすも、其供給そのきやうきやうを増ます譯わけには行いかぬ、而しかして其價格そのかかくは需要者じゆえうしやあれば其評價そのへうかの最高額さいかうがくが價格かかくとなるので、此價このか格かくたる、人ひとと場合ばあひとにより大なる差額さかくあるは其特色そのとくしやくとする所ところである。併しかし現げん實社會じつしやくわいみを見るに社會連帶しやくわいれんたいの法則はふそくが完全かんぜんに行おこなはれぬ、従したがつて需供じゆきやうの調節てんせつに由よ

ると謂いふ物價ぶつかの原則げんそくが行おこなはれぬ場合ばあひがある、其その一ひとは獨占價格どくせんかかくて其その二ふたは小賣こうり相場さうばである

獨占價格どくせんかかく

は獨占事業どくせんじぎふ假令べいこくば米國べいこくのトラストとらすとの如ごとき若もしくは法律はふりつによりて

特許とくきよされた發明品はつめいひん若しくは一定ていの區域いきま内の電氣でんき、瓦斯事業がすじぎふなどに顯あらはるゝのである、但し之これとて、代用品だいやうひんもあり輸入品ゆにゅうひんもあり其他そなたいろゝの關係くわんけいある故ゆへに際限さいげんなく價格かかくを引上ひきあぐることが出來できぬは勿論もちろんであるが、他たの財さいよりは價格かかくの騰費とうきし易やすいのは止やむを得えぬ現象げんじやうである、又また

小賣相場こうりさうば

は自由競争じゆうきやうきやうが充分じゆうぶん行おこなはれても割合わりあひに高たかいことがある、是需これじゆえ要え

者しやは素人しらうとて其財そのさいの品質ひんしつに關くわんし充分じゆうぶんの智識ちしきがないのと、又其財またそのさいの價格かかくの變動へんどう

を知らぬ場合が多いからである。以上は需要供給の調節の緩急の作用に就て財其ものより起る點を説明したのであるが、又

貨幣の變動

は需給の調節の緩急に影響を及ぼすのである。既に述べた通り貨幣は交換の媒介、價格の尺度及び價格蓄積の用途を辨するものであるが、茲に謂ふ需給調節の緩急に影響し物價の高低を來すは、交換の媒介價格の尺度として市場に流通するもので、價格蓄積として市場に流通せぬものは直接關係を有せざるは勿論である。此物質に關係ある貨幣を名けて

普通

通貨

と稱する、通貨の中には政府の發行の不換紙幣も銀行發行の兌換

券もあり(我國では此兩種とも無い)、獨り本位貨幣及び補助貨幣のみを謂ふのではない、而して

通貨と物價との關係

は第一本位貨幣の品位量目の増減、第二通貨數量の増減、第三通貨流通の遲速の爲めに變動あることである。第一の理由は通貨とは秤量又は試験の煩を避くる爲めに法律上一定の様式を定めて鑄造したものに過ぎぬ。故に其實質價格と額面價格と同一たるべきものである。然るに若し實質價格以上に額面價格を附した時は、之に比例して物價の騰貴したことは歴史の證明する所である。従つて又通貨に磨損あれば價が騰貴し、且つ外國貨幣と比較計算上に影響を來す、本位貨幣の品位量目が

外國爲替相場に變動を及ぼすは此理由に外ならぬのである、第二の理由は取引上の財即ち貨物相互の關係の如く、通貨と物價との關係は需給の調節の物價の原則と同一である、即ち通貨の數量多くして貨物の數量少いときは物價騰貴し、之に反するときには物價下落する、第三の理由は通貨の流通が速かなる時は、其物價に及ぼす影響は其速度に等しく倍數の通貨流通すると同一作用である、例へば千圓の通貨が十回流通すると壹萬圓の通過が一回流通すると物價に及ぼす影響は相同じきものである、同額の通貨ならば流通の速かなるときは物價騰貴し、流通遲滯するときには物價下落する従つて其國の支拂の時機又は支拂の組織などは物價の上に影響を及ぼすは

勿論である。

物價の高低の影響

を見るに第一個人に及ぼすは、直接取引に於て物價騰貴すれば需要者は不利益を被り供給者即ち生産者商人等は利益を受くる、物價下落すれば即ち此反對の現象を見ること明白である、又間接の取引に於ては契約を爲したる時と之を履行するときとの間に、多少の日時を隔つるから、若し其間に物價騰貴すれば支拂を爲すもの損失を蒙り、支拂を受くる者利益を受くる。第二企業に及ぼすも亦同一理由で、物價騰貴すれば企業家は豫期以上の價格で生産物を賣捌き、原料供給者又は直接に其事業に關係した労働者に對し、従前の價格で仕入代又は賃錢を支拂ふから、企

業家は何等勞力を出すことなく物價變動の爲めに大なる利益を收める、若し物價下落した時に之と反對の結果を見るのである。第三財政に及ぼすは是又明白で國家の収入は豫め法律豫算で一定し、物價騰貴すればとて俄かに増徴する譯に行かぬから、財政上の缺損を來し、物價下落する時は剩餘金が生ずるのである。

第八章 信用

信用の意義

は簡約すれば一方の給付に對し日時を隔て、反對給付を爲す行爲である。されば此信用取引の起るは其要素として給付を爲す者と反

對給付を爲す者との間に意思の合致を要するも、意思の合致のみにては未だ經濟上の信用取引と謂ふことが出來ぬ、此意思の合致が經濟行爲の上には表はれたものでなければならぬ。此信用制度は社會連帶上當然起るべき性質のもので、又今後益々發達すべき等のものである、若し信用を取引の日時を標準として區別するときは直取引と信用取引との二つとする。

直取引

とは普通の賣買交換で取引を爲す者が各其需要するものを直に交換すること、信用取引は交換者の一方が其所有する處の物を給付するも、直に相手方をして反對給付を爲さしめぬことである。假令ば消費者が商人より貨物を買ひ取るも直に其代金を支拂はず後日之を支拂ふ如きは

である。然らば

信用取引は如何にして起る乎

と謂ふに、(一)當事者が貨物を給付する能力

(二)當事者が反對給付の義務を履行する自由意思、(三)此履行を爲さぬときは法律により之を強行する權利規定、此三つの條件なければ信用取引は起らぬ、されば文化進歩せず人類の道義心低く法律の保護も薄弱なる時代は信用取引がないが、現今の經濟社會に若し信用取引なければ、經濟行為及經濟組織が殆ど其活動運用を停止すべき有様となつたのである。財は人により其必要の程度同じでないが、若し其最も必要とする者の手にて活動する時は最も大なる

財の効果

が顯はるゝのである、假令は茲に巨萬の富を有する人あるが、

企業の才幹なく唯死藏するに過ぎぬ時は、此財は何等の活動を爲さぬから永久効果を見るの時期がない、然るに他に企業の才幹ある人があつて有益なる事業を起さうとするも資本がない場合に、信用によつて前者より資本を借入れ事業に着手すること出來たならば、此企業家は利得を收め資本家は利子を得て双方の好都合なるのみならず、國家經濟より之を見るも死藏された財は一方には資本となつて活動し、他方は信用の形式に於て其通貨は交換の媒介となるから、一國の通貨を節約すること夥しい。然して現今此

信用の機關

となりつゝあるは重に銀行で、又米國のトラストや各國の

ビルブローカーも亦信用機關である、此信用機關の補助機關として信用調査の任務を帯ぶる興信所もある。斯く信用は資本の移轉又は生産力の増加を助くるものである。次ぎに

信用の作用及利益

を列擧すれば。第一遠隔の地方に金錢の支拂を爲すに貨幣を輸送せば、利子を失ふ計りてなく時間と勞力とを徒費するが、銀行券、爲替手形、小切手などの信用によらば此不利益がなくて済むのである。第二信用は金銀貨幣の代用を爲すから、金銀貨幣の毀損を防ぐ。第三信用は資本を最も効果多き方面に活動せしむる。第四資本は零碎なるときは生産を助くる効力がないが、信用は零碎なる資本を集めて巨額の資本となすか

ら生産を助くる効力が多い。第五信用は資本を節約し一國の經濟に大効果あるは一方の給付に對し直に反對給付を爲さずに生産を營むからである。第六信用は個人間の經濟並に社會的關係を厚ふする効果がある故に、一國の經濟の發達を助くること大なるものである。併し又信用制度にも弊害があるから其運用を誤まらぬやうにせねばならぬ。其

信用制度の弊害

とは第一生産者は信用により融通自由なるが爲め浪費の傾向生じ生産費が増加する、第二消費者は信用によつて供給を受けて其分度を顧みず浪費し易い、第三信用の濫用は不確實なる企業を爲さしめ或は投機を奨勵し一國の經濟を紊亂する、第四貧民は富者の如く信用の利益を

受くること叶はぬから、信用制度は善用せざれば唯益々貧富の懸隔を甚しくする害ある許りである。最後に

信用取引の性質及種類

を述べんに之には三種類ある、第一は當事者の

種類によるもので更に之を個人信用と公信用とする、此公信用は國家又は自治團體などの公債となつて現はるゝものである。第二は信用の基礎が其信用を受くる人格にあるが其提供する擔保物にあるかにより對物信用及び對人信用の二つに區別さるゝ、第三は信用の結果が生産事業に用ひらるゝか又は消費さるゝかに由り、是又生産信用と消費信用との二つに區別さるゝのである是等各種の信用は詳しく論ずれば複雑面倒になるが、其意義は

要するに讀んで字の如して、以上の名稱によつて了解されやう、而して信用制度も亦社會連帶の上に立つべきは當然である。

パチエラー
オプ、ロース
渡部萬藏著

英和對譯 日本財政史論

定價六拾錢
郵稅六錢

法學博士神戸正雄氏(京都法學會雜誌)曰く本書は我國の建國以來現代に至る財政の變遷の梗概を小冊子の中に叙述論評し(中略)簡單なれども能く要領を得たり特に其英和兩文より成ると書中間々歐米の史實を比較参照したるとは學徒を益する決して尠少ならず(下略)

發行所

東京市一橋通町
(振替口座三百七〇番)

有斐閣書房

右日本財政史論を新報知社に御申込の分に限り特に割引定價五拾錢
(外に前記送料を要す)にて取次販賣す

樞密院議長公爵山縣有朋閣下題字
司法大臣松田正久閣下題字
法學博士富谷銈太郎先生序
法學博士河村讓三郎先生序
法學博士志田鉦太郎先生
法學博士小河滋次郎先生

法律大辭典

校者 渡部萬藏著
パチエラー、オプ、ロース
全一冊紙千七百頁
體裁 菊判背革金字附錄 英佛獨法律
入六號三段組 內地小包料金貳拾錢
定價金五圓 臺灣支鮮金五拾錢

法律新聞 法學界空前の大著述
○時事新報 穩當なる英佛獨對譯
○法學協會雜誌 能く多敷

易に巨細の事項を知らるを得べし
○太陽 萬般の事件を解決す
○東洋經濟新報 實務家の座右の書

慶應義塾學報 政治家の爲に頗る有益なる參考書
○日本法政新誌 黒人筋にも便利なるは勿論素人向にも良好の辭典

法學志林 著者の勞苦や成功せり

發行所

東京市神田區猿樂町廿四
電話本局一七五三番

修學堂

右法律大辭典は新報知社に申込まるゝ分に限り壹部金四圓に販賣す(但し外に前記の送料を要す)

パチエラー 渡部 萬藏 著 洋裝背革特製 紙數千五百頁 正價金壹圓八拾錢 小包料
オプ、ロース

人一代の法律

本書 憲法、府縣都市町村制、民法、戸籍法、
商法、民事訴訟法、刑法、刑事訴訟法、
訴訟諸手續、諸願屆書式、

●時事時報曰く 本書は條文を主とせず事件を主として一事件毎に關係法律を取纏め六法を
を参照するの繁をも省 始め現行法律全部に亙りて口語文を用ひ丁寧に叙述し六法全書の如く彼是
き人の應用に便せり ●東京朝日新聞曰く 人一代の出來事により順序を立てた處は誠に新
九百を設けて簡單にししかも頗る明瞭に口語文で述べて ●國民新聞曰く 著者は曩に法律大
居る一般素人にとりて此上の無い都合の良いものである ●國民新聞曰く 辭典を著したる人
今此好著あり法律全部を人一代の出來事に排列し出生に始まり學齡兒童成年 相續等を経て隱居
死に至る順序を以て通俗平易に詳述す又必要の箇處には諸願手續書式を挿入すること四百有
餘意頗る ●大阪朝日新聞曰く 趣味ある文字で講釋したもので別に五十頁索引を附した用
周到の法律 ●大阪毎日新聞曰く 現行法令の重なるものと日常必要の手續や書式等で網羅し
願問でふる ●大阪毎日新聞曰く 平易親切なる説明を加へ法律の素養なき者にも善く解し
得べく家庭常備用として一冊を具ふれば便利を感ずること多かるべし

發行所 公文書院

振替東京二〇五二二番 振替口座東京四〇二七番 東京市日本橋區通四丁目四番地
人の一代法律は一般國民に最も便利にして最も利益なるを認め候に付新報知社に申込みたる分
に限り特別割引金壹圓五拾錢(別に前記送料を要す)にて御注文に應じ候

- 新藥ホシ血の道藥 ●新藥ホシ胃腸藥 ●新藥ホシ眼藥 ●梅毒新藥ホシサヨリン ●新藥ホシプラ
- スター ●新藥スター(清涼劑) ●新藥ホシコロゲイン(腹痛氣付藥) ●新藥アンチツベルケン(肺
- 病藥) ●新藥ホシズルフアミン(淋病注入藥) ●防臭殺菌オメガ(固形クレソール) ●心臟脚氣新劑
- ハリベチン ●新藥ホシ婦人坐藥 ●新藥ホシ下劑 ●新藥ホシ虫下シ ●淋病新藥ホシゴノール ●新
- 藥ホシ祛痰藥 ●新藥ホシ痔劑 ●新藥ヒーナス(綿棒付) ●新藥ホシリウマチス藥 ●四季あれしら
- ず ●新藥ホシ健康保險丸 ●ホシ複方鹽剝散 ●特製新製ホシプラスチック ●新藥ホシチオール ●新
- 藥ホシ下痢止 ●新藥ホシ小兒蟲の藥 ●新藥ホシ風藥 ●皮膚新藥ホシセブチン ●新藥ホシ麻刺里
- 亞丸 ●新藥ホシ外用下劑 ●新藥ホシネルベン(腦神經病藥) ●新藥ホシ齒液 ●新藥ホシ紫雲膏 ●
- 星式洗滌器レアイース

全國特約店にあり最寄りにて御求を乞ふ。
特約店希望者は葉書にて御申込を乞ふ。

東京市 京橋區 南傳馬町 星製藥株式會社
電話特京橋一七八五、同二二七九番

振替東京二〇五二二番

出版書籍目録

以下掲ぐる書籍は弊社出版に係り何れも江湖の好評を博したるものに御座候御注文の節は振替口座を御利用あれば僅か金壹錢にて送金も通信も共に爲すことを得るが故に特に御注意申上候

東京市京橋區
南傳馬町三丁目

新報知社

元帥陸軍大將公爵山縣有朋閣下題字
前遞信大臣男爵後藤新平閣下題字

樞密院副議長伯爵芳川顯正閣下題字
電話京橋二二七九番 振替東京八三八三番

杉山其日庵著

乞食の勤王

其日庵杉山茂丸先生は布衣にして一代の師表たる巨人也。頃者先生當今の時弊に深慨し、縦横の筆を揮て、平戸佐廣の名刀を主材となし本書を著し以て勤王の大義を闡明す。報國の讀本にして國民必讀の典範也。蓋し是れ本社が是を刊行し敢て江湖の諸君に提供する所以也。且本社獨得の廉賣主義に基き、其體裁極めて優美、内容甚だ豊富、且價相の廉なるは、尙且新報知其物の如し。乞ふ一本を備へて南朝の遺臣が乞食し乍ら勤王の大義を説き廻はれたる壯烈無双の事蹟を知れ。行以來好讀々々今や第四版を重ねるに至り候間、新報知讀者諸君の御如意に報いむが爲め此際五千部を限り郵税共金拾貳錢にて發賣可仕候

菊判半截二百二十頁挿繪 銅版木版二十數葉
全壹冊定價一部金拾八錢 郵税金貳錢

新報知社編輯部謹輯

菊判二百八十頁金文字入洋
裝美本鮮明寫真版數葉入

明治大帝

第三版
定價五拾錢
送料六錢

有名新聞批評

▲時事新報曰く 本書の採るべきは記述の簡勁にして取材の恰當なること、裝幀は敢て善美を凝らさぬも瀟洒印つて書の性質と相合する

▲東京朝日新聞曰く 文章取材共に良、他の類書の如く糊と鉄とを以て製造したるものにあらず

▲都新聞曰く 明治天皇一代の筆蹟と御聖徳とを記し奉れるもの簡にして最も要を得たり

▲東京毎日新聞曰く 明治天皇の御性行御逸事の一斑を詳述し、今上、皇后、皇太后陛下の御平生をも叙し奉り、此等類書中好記念たるを失はざ

▲大阪毎日新聞曰く 明治天皇御一代文章體裁等既出類書に比し整へるを可とす

▲讀賣新聞曰く 明治大帝と時代、御幼時、御孝道等以下十六章外に、今上、皇后、皇太后陛下に於ける御靈輿、桃山御陵、御執筆の宸翰等の寫真版數葉あり、好紀念書なり

直接御申込に對し特に弊社に於て送料を負担す

男爵 後藤 澤榮 閣下題字
 新報 知社 編輯 部 纂

帝國大學農科大學 教授 農學博士 横井時敬 先生序

最新農家副業全書

◎全壹冊 ◎總紙數三百餘頁 ◎洋裝美本
 ◎美麗なる寫眞版挿入 ◎總振假名付
 ◎正價 金六十錢
 ◎送料 八錢

農本主義たる我日本の發達は農村の繁榮に期せざるべからず農家の副業に俟たざるべからず本年の第卅三回農家副業奨励の建議案を可決したるも亦當面の急務なるを認めたる爲めならずんばあらず新報知社は夙に茲に見る所あり有ゆる農家の副業に關し専門學者及實地家の意見を叩き又府縣勸業課の調査を參考とし最も新しく最も精確なる材料に基き本書を編纂したりされば坊間多行はるる孟浪杜撰なる類書と同一視すべからず殊に其内容豊富にして殖林、竹林、桑樹、南瓜栽培、白菜栽培、草蓐栽培、山葵の栽培、百合の栽培、除虫菊の栽培、藥用の乾燥の栽培、藥用人の參の栽培、黃連栽培、輸出作物、甘藷の栽培、果樹、乾燥果實の栽培、蔬菜の乾燥、果實蔬菜、鑛物製造、和布の製造、茶の製造、味噌製造、酒造、醤油製造、木綿織物製造、晒箔及洗粉製造、豆腐製造、豆乳製造、竹工、製造、豆腐製造、水豆腐製造、納豆製造、味噌製造、山葵の栽培、百合の栽培、除虫菊の栽培、扇の製造、木炭製造、木製眞田、納豆製造、漆液製造、畜羊、蠶製造、養兔等八拾有餘の副業を懇切に説明せり

新報知社發行 近刊豫告

陸軍大臣題字
 新報知社編輯

入隊 準備 壯丁 讀本 全壹冊 定價未定

米國セントルイス醫科大學
 ドクター、オプ、メデシン 鈴木 司 著

人一代の衛生 全壹冊 定價未定

274

335

新報知

毎月一回一日發行

定價壹冊前金二錢郵稅五厘

一ヶ年前金稅稅共金二拾五錢

新報知は基本金拾萬圓を以て經營する日本第一の廉價なる雜誌なり創立以來四箇年を経て購讀者日に月に増進し社會の信川益々厚きもの抑も故なくんばあらず試に其内容を見れば趣味と實益とを兼ね政治經濟文學宗教社會有ゆる出來事を網羅し一小天地の觀あるが故に他の千百の新聞雜誌を讀まんより本誌一部を閱讀せば時勢後れとなることなし往復はがきを以て申込みあれば見本一部を進呈すべし

終

